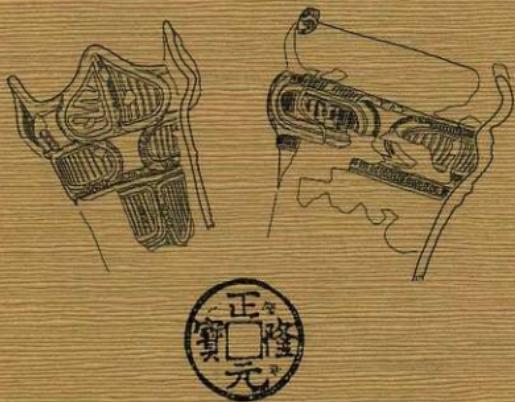


上野原遺跡

UENOHARA

SITE

国道358号甲府精進湖線改築工事に伴う発掘調査報告



1996・3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

上野原遺跡

UENOHARA

SITE

国道358号甲府精進湖線改築工事に伴う発掘調査報告

1996・3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

甲府盆地の南縁をなす曾根丘陵が御坂山塊に接する付け根に中道町上野原遺跡は立地しています。この上野原遺跡は、城越遺跡・二階堂遺跡と連続した遺跡として早くから知られていました。1971年には甲府精進湖間有料道路建設に伴い発掘調査が進められ、大規模な縄文集落であることが明らかとなり重要な遺跡として注目を浴び、保存を強く訴える運動にまで発展しました。今回の発掘調査は、国道358号甲府精進湖線の改築に伴うものであり、縄文集落の中心からやや外れていましたが、縄文時代中期中頃の住居跡4軒、土坑・ピット約70基などの遺構を発見いたしました。また、中世のものと考えられる黒色土の硬化面が連続するなどの道路関連遺構が5条ほど見つかりました。

思えば、国道358号甲府精進湖線は旧「中道往還」であり、町名となっている「中道」の名称が文献に登場するのは、天正10年（1582）の徳川家康の甲斐入国時であります。これはまさしく武田氏滅亡の年であり、織田信長も武田滅亡後の戦後処理をしたのち、上野原遺跡にほど近い「右左口」に宿をとり、家康が整備した中道往還を経て安土に凱旋をしています。今をさかのばること約400年前、山梨の歴史にとっても大きな節目に、この「中道」が重要な道として役割を果たしています。

最後に、ご協力をいただきました山梨県土木部をはじめとする諸機関、直接発掘調査や整理作業に携わった方々、さまざまご教示をいただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成8年3月15日

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重



写真1 SF2・SF3道路関連遺構清掃作業

例 言

1. 本書は、国道358号線改築工事に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが1994年に実施した東八代郡中道町右左口に所在する上野原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、村石真澄・大谷満水が編集・執筆した。分析依頼・依託したものは、文頭に執筆者を記載した。
3. 遺跡および遺物の写真撮影は村石真澄・大谷満水が行った。
4. 調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

1. 磚の区別は次のような分類を目安とした。

巨磧：256mm以上 [人頭以上]

大磧：64～256mm [拳大以上人頭大以下]

中磧：4～64mm [アズキ豆大以上～鶏卵大以下]

細磧：2～4mm [アズキ豆大以下]

2. 土層の色調や粒状構造等は、新版『標準土色帖』日本色研事業株式会社発行に準拠した。
3. 図中の矢印は真北を示す。

本 文 目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 過去の発掘調査	1
第2節 今回の発掘調査の概要	2
第3節 調査組織	9
第4節 調査方法	9
第2章 立地と環境	10
第1節 地形	10
第2節 中道往還	11
第3章 遺構と遺物	12
第1節 道路関連遺構	12
第2節 遺構出土の奈良・平安時代以降の遺物	26
第3節 繩文時代の遺構と遺物	27
第4章 自然科学分析	66
第1節 上野原遺跡から出土した大型植物化石	66
第2節 上野原遺跡の炭化材の樹種	67
第5章 遺構と遺物の検討	71
第1節 古道中道	71
第2節 石器組成と打製石斧	73

図版目次

甲府盆地	目次
第1図 上野原遺跡発掘調査範囲	2
第2図 上野原遺跡1994年発掘調査範囲	7
第3図 基本層序	9
第4図 上野原遺跡周辺鳥瞰図	11
第5図 SF1 道路関連遺構出土遺物	12
第6図 SF1 道路関連遺構	13
第7図 SF2 道路関連遺構出土遺物(1)	15
第8図 SF2 道路関連遺構出土遺物(2)	15
第9図 SF2・SF3 道路関連遺構	17
第10図 SF2・SF4・SF5 道路関連遺構	18
第11図 SF4 道路関連遺構出土須恵器	22
第12図 SF3・SF4・SF5 道路関連遺構	23
第13図 遺構外出土の奈良・平安時代以降の遺物	26
第14図 SB1 住居跡・SB4 土坑・SP5・SP23	27
第15図 SB1 住居跡出土土器	28
第16図 SB2 住居跡	29
第17図 SB2 住居跡出土土器(1)	31
第18図 SB2 住居跡出土土器(2)	33
第19図 SB2 住居跡出土土器(3)	34
第20図 SB2 住居跡出土土器(4)	35
第21図 SB2 住居跡出土土器(5)	36
第22図 SB3 住居跡	38
第23図 SB3 住居跡炉跡	40
第24図 SB3 住居跡出土土器(1)	42
第25図 SB3 住居跡出土土器(2)	42
第26図 SB3 住居跡出土土器(3)	43
第27図 SB4 土坑	43
第28図 SB4 住居跡出土土器(1)	45
第29図 SB4 住居跡出土土器(2)	46
第30図 SB5 土坑出土土器	47
第31図 SB5 土坑	48
第32図 SB6 住居跡	49
第33図 SB6 住居跡炉跡	51
第34図 SB6 住居跡出土土器	51
第35図 SZ1 不明遺構	51
第36図 SZ1 不明遺構出土土器(1)	52
第37図 SZ1 不明遺構出土土器(2)	53
第38図 SP57 土坑出土土器	54
第39図 SP58 土坑出土土器	54
第40図 遺構外出土の土器（縄文時代～古墳時代）	54
第41図 SP20・SP23・SP24・SP34～36・SP42・SP44・SP57・SP58 土坑	55
第42図 土偶	58
第43図 土製円盤	58
第44図 石器(1)	61
第45図 石器(2)	62
第46図 石器(3)	63
第47図 石器組成	65
第48図 遺構別石器組成	65
第49図 「右左口」宿の道標	72

表目次

第1表	土坑一覧	57
第2表	土偶一覧	59
第3表	土製円盤一覧	59
第4表	石器觀察表	60
第5表	石器組成	64
第6表	出土した大型植物 化石（乾燥試料）	67
第7表	出土した大型植物 化石（水浸け試料）	67
	報告書抄録	卷末



甲府盆地

第1章 調査の経過

第1節 過去の発掘調査

1971年〔第1~3次〕発掘調査

上野原遺跡は、土器などの表面採集により城越遺跡・二階遺跡と連続した遺跡として早くからその存在が知られていた。甲府精進湖間有料道路建設に伴い、中道町右左口遺跡発掘調査団（調査員吉田章一郎・上野晴朗・田村晃一）が組織され発掘調査が進められた。調査は、青山学院大学考古学教室を主力として第1次〔3月8日～3月末〕、第2次〔4月12日～5月末〕、第3次〔7月6日～8月24日〕の8回に渡って実施された。第一次調査中には、田辺知事が「風土記の丘」構想のことに関連して遺跡を視察し、大規模な縄文遺跡に驚き、「有料道路を一部変更してもよい」という発言をして注目された。しかし、中道町では路線変更に難色を示し、両者の意見は併行線をたどった。調査の進展により縄文集落の全貌を推定できる本県でははじめての遺跡として注目を集め、地元の人々・山梨郷土研究会・山梨大学考古学研究会などにより路線変更保存問題を強く訴える運動が盛り上がった。しかし残念ながら、建設工事は既定の線に沿って進められ発掘された遺構群は消滅した。

縄文時代中期を主体として、完全なプランの住居跡15軒、半壌7軒、敷石遺構・配石遺構と考えられるもの数ヶ所、土坑・ピット多数が発見されている。また、縄文時代前期末の十三菩提期の整穴住居（4号住）の存在は注目されている。

1984年〔第4次〕発掘調査

笛吹川農業利水事業団国営幹線管水路敷設工事に伴い、山梨県埋蔵文化財センターによって昭和59年10月



写真2 SF1道路関連遺構清掃作業

8日～12月27日のほぼ3ヶ月にわたって調査が行われた。幅の狭い線的な範囲ではあるが、遺跡全体を大きく縦断するような調査が進められた。その結果、昭和46年の調査範囲を中心とする部分に、遺構が集中することが確認された。前期初頭（木島併行期）の竪穴状遺構1、前期後半（諸磯b～c期）の住居跡1・土坑1、中期中葉（新造期の住居跡1・土坑2、藤内期の住居跡2・土坑6、井戸尻期の住居跡7・土坑10、単独埋甕2、竪穴状遺構1）の住居跡・土坑など、中期後半（曾利期）の住居跡4、配石遺構1、土坑5、単独埋甕3、竪穴状遺構1などが発見された。

第2節 今回の発掘調査の概要

一般国道358号線拡幅部分が遺跡範囲内であることが明らかであり、山梨県埋蔵文化財センターによって平成6（1994）年5月9日～12月9日にかけて発掘調査を行った。整理作業は平成6～7（1994～1995）年度にかけて行い、平成7（1995）年度に報告書を作成した。

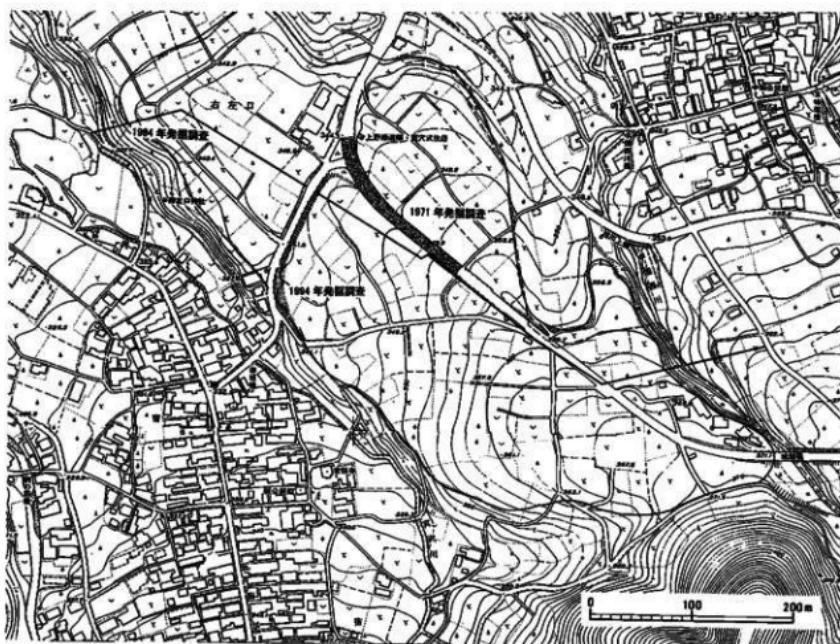
台地縁辺にあたるため縄文集落の西端にあたり、遺構の分布はあまり濃密でなく、縄文時代中期中葉の住居跡3軒、土坑約60基が発見された。また古道「中道往還」に関係すると考えられる硬化面をもつ道路状遺構5条が確認されている。

引用文献

上野晴朗 1975 「上野原遺跡」「中道町史」上

山梨県教育委員会 1987 「上野原遺跡・智光寺・切附遺跡」（山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第19集）

山梨県教育委員会 1996 「上野原遺跡」（山梨県埋蔵文化財センター調査報告）



第1図上野原遺跡 発掘調査範囲（1971～1994年）

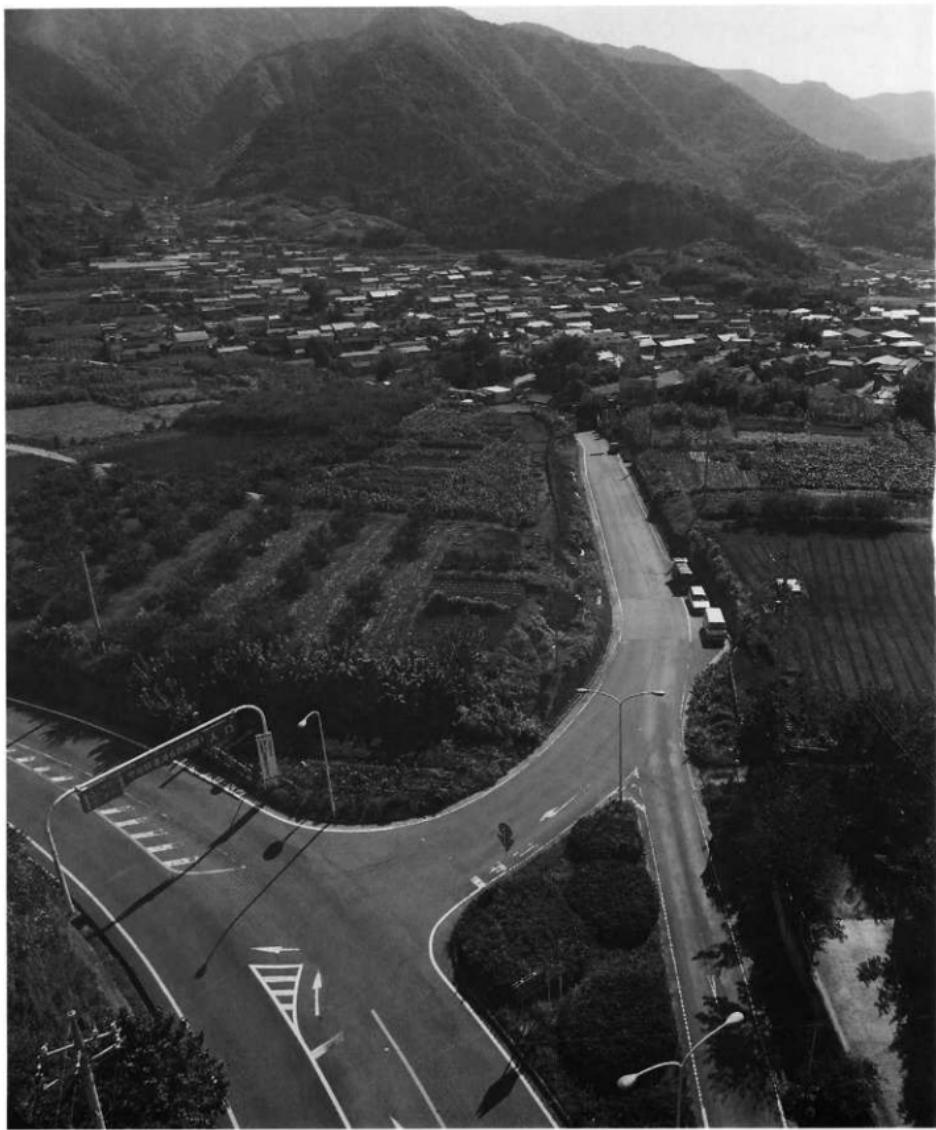


写真3 上野原遺跡遠景（北東から）背景は「右左口」宿



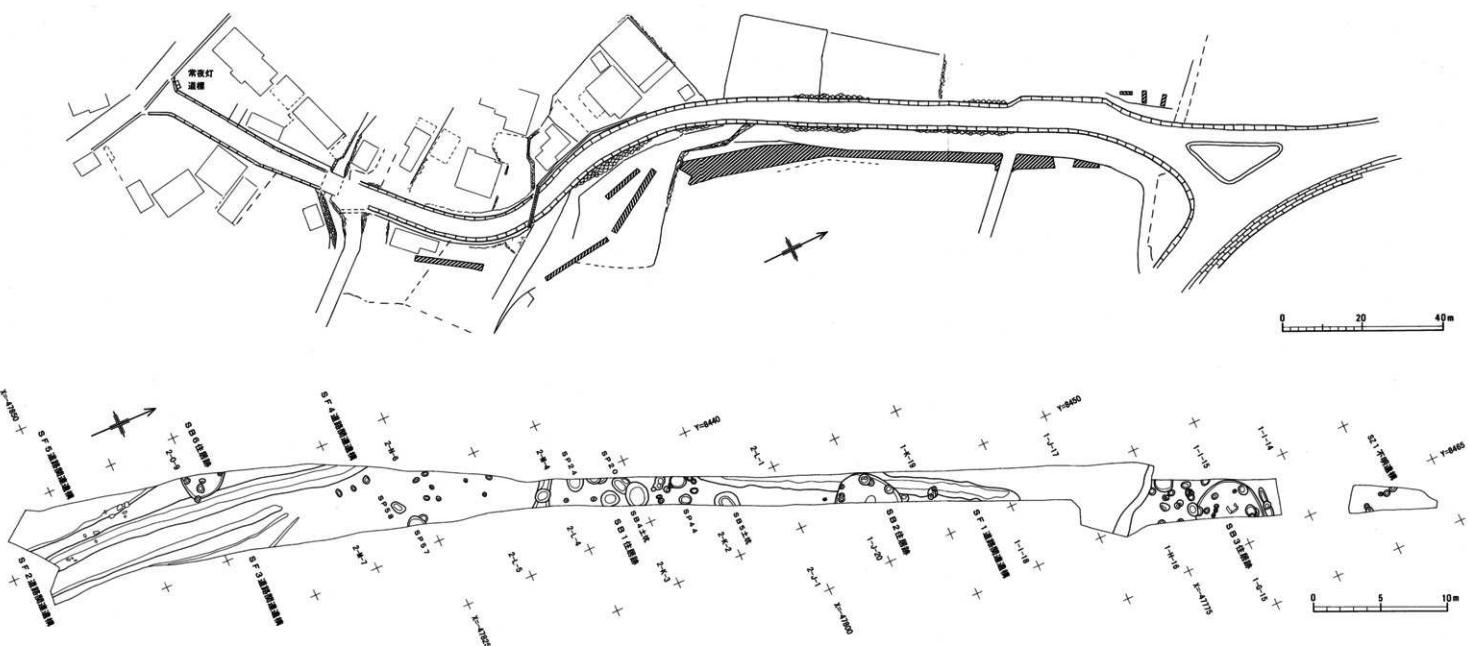
写真4 上野原遺跡遠景（南西から）背景は甲府盆地



写真5 上野原遺跡（北東から）現国道は切り通しとなっている



写真6 上野原遺跡全景（真上から）



第2図 上野原遺跡 1994年発掘調査範囲

第3節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会 教育長 加藤正明

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 大塚初重

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター 副主査・文化財主事 大谷満水
文化財主事 村石真澄

調査員 平重蔵・村松佳幸

調査参加者 有賀ひろ子、出月満江、出月遊亜子、伊藤順子、長田可祝、長田てる美、久保田明義、越石力、小林よ志子、齊藤重信、齊藤律子、平美与枝、土屋ふじ子、内藤安雄、中込幹一、中込よしお、中込星子、名取洋子、平川涼子、古屋和喜子、宮坂晴幸、向井製装春、望月芳郎、矢崎米子

協力者・機関 山梨県土木部、中道町教育委員会、林部光、河西学

第4節 調査方法

国土座標を基準にグリッドを設定した。第2図に記したXおよびYの数値は、平面直角座標VIII系原点からの距離（メートル単位）である。つまり、X軸は真北（方眼北）を示している。まず、100m×100mを大グリッドに設定し、さらにこれを100m×100mに分割した。

基本層序

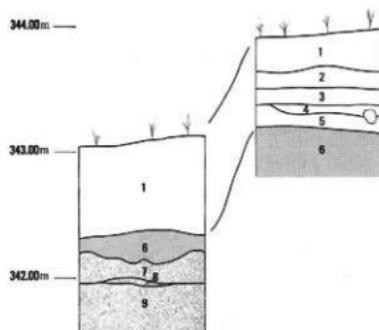
曾根丘陵を構成する地質は曾根層群と呼ばれ、下位から高部層、寺尾疊層、黒富士火砕流堆積物、局所的な佐久シルト層、八ヶ岳の崩壊による董崎岩屑流堆積物、さらに上位に扇状地性砂疊層（原疊層）が堆積している（内藤1988）。原疊層は、上部は風化し古土壤となっていて、その上位に褐鉄鉱の薄層を挟んで御岳第1テフラを不整合にのせ、さらに厚さ2~3mの褐色風化火山灰層（曾根ローム）の堆積が見られる（河西1990）。

今回の調査では、遺構を発見した台地上においては、若干の傾斜と層厚の変化はあったが、基本的な層序はほぼ同様であった。確認した最も下部の土層は、第3図の7~9層とした橙色~白色~黄褐色の色調で粘土~シルト層の御岳第1テフラ〔On-Pm1、95000年前（日本第四紀学会1996）〕起源の堆積物である。この上には6層とした黄褐色土があり、これは曾根ロームと呼ばれる風化火山灰層である。また図示しなかったが、この層中には立川ローム層第II暗色帯に対比される堆積が認められた。これら基本層序については、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏から現場にて御教示を受けた。

河西学（1990）「立石遺跡での先土器遺物を含むる地層」『研究紀要』6 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター P47-58

河西学（1987）「上野原遺跡の火山灰層」「上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第19集 P95-98

内藤治（1988）「曾根丘陵」「日本の地質4 中部地方」P171-173
共立出版



1. 暗褐色土 (10YR3/4) 表土
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 旧耕作土、しまりに欠ける
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 旧耕作土、しまりに欠ける
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 非常に強く硬化している
5. 黒褐色土混じり褐色土 (10YR4/6) 路面構築面、まだら状、しまり強い
6. 黄褐色土 (2.5Y5/4)
7. 黄褐色細砂質シルト (10YR8/6) Pm-I起源の堆積
8. 灰白色粘土 (7.5Y8/2) Pm-I起源の堆積物が粘土化したもの
9. 橙色粘土 (5YR6/8) 粘性が強く、非常に強く硬化している。
鐵化鉄を含む、Pm-II起源の堆積物が粘土化したもの。

第3図 基本層序

第2章 立地と環境

第1節 地形

甲府盆地南縁に東西方向に横たわる曾根丘陵が、御坂山塊に接する付け根に上野原遺跡は位置する。曾根丘陵は古扇状地性堆積層（寺尾疊層・原疊層）や火山岩屑流堆積物（水ヶ森泥流・黒富士香火碎流・蘿崎岩屑流）などの堆積に加えて、御坂山塊の隆起に伴う断層や褶曲を受けて現在の地形が形成されている。とくに御坂山塊の隆起の影響により、甲府盆地側の丘陵先端が高くなり、平坦な台地状の地形が大きく広がっていることが特徴的である。こうした地形を反映し、周辺の遺跡分布は濃密で、曾根丘陵北端に向かって、方形周溝墓が多く発見された宮の上遺跡・上の平遺跡など多くの遺跡が存在する。また、さらに小平沢古墳、天神山古墳、大丸山古墳・鏡子塚古墳・丸山塚古墳など県内で最も古い古墳がこの地域に集中している。

上野原遺跡の立地は、北西方向に緩やかに傾斜する日当たり良好な台地状地形の標高350m付近にある。

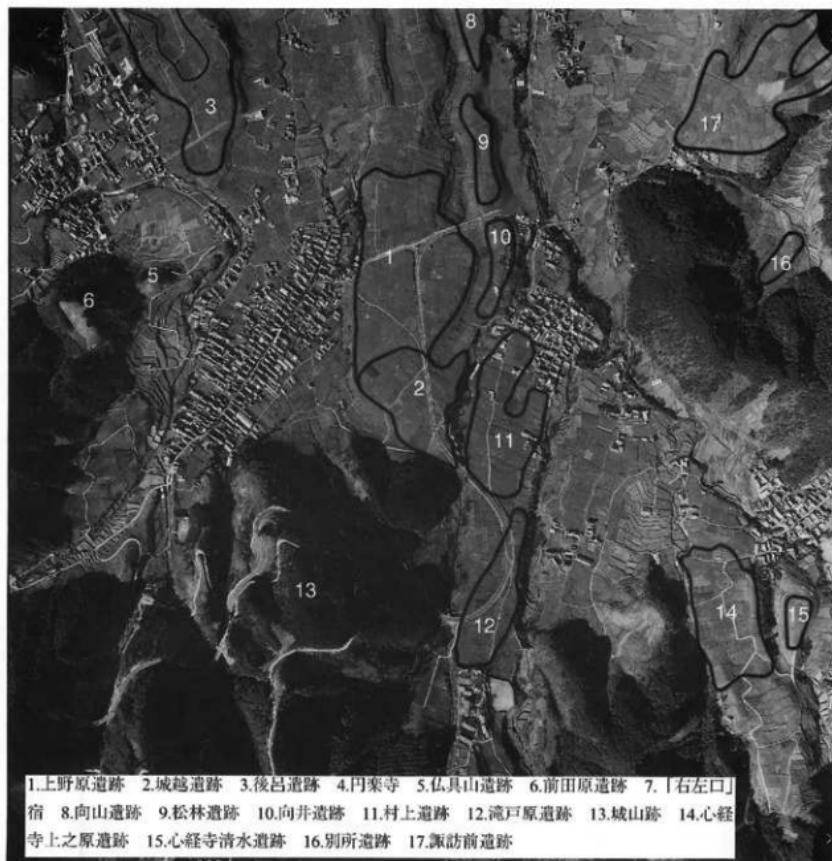
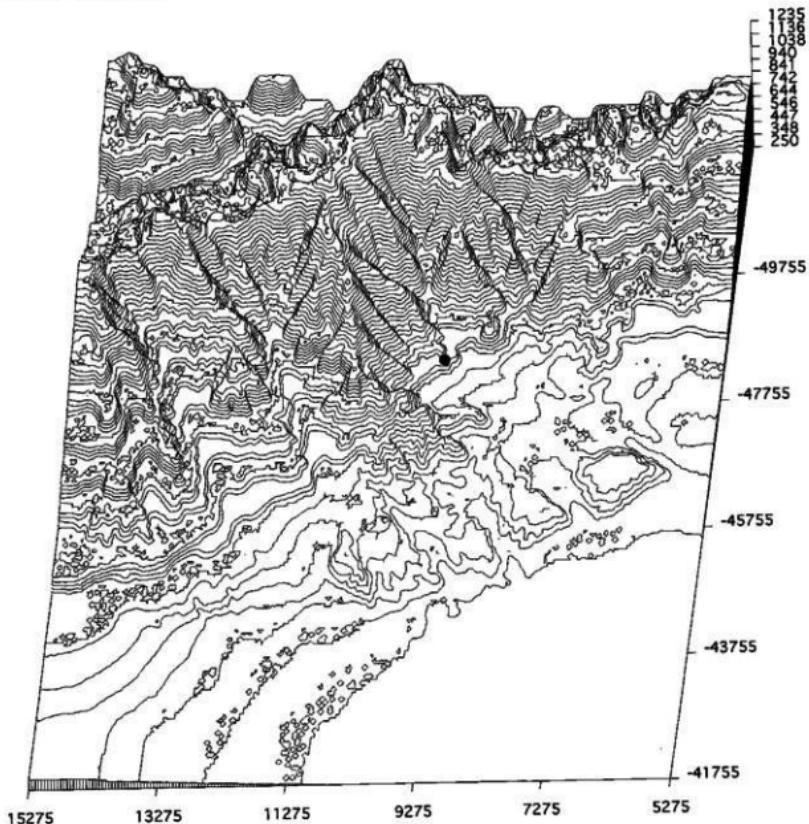


写真7 上野原遺跡周辺遺跡分布図

この台地状地形は幅約250m、長さ約600mと広大であり、付け根付近は城越遺跡、中央から先端までが上野原遺跡と命名されている。甲府精進湖線の建設に伴う1971年の発掘調査では、この台地状地形のはば中央部が対象とされた。今回の発掘調査は、この西半から台地状地形の西側縁辺部に当たっている。成果を検討すると、地形条件からの予測どおりに中央部に近づくにしたがい、縄文時代の遺構・遺物が増加することが確認された。

第2節 中道往還

駿河湾と甲府盆地とを最短距離で結ぶ古道の中道往還がこの遺跡内を通過している。この古道は戦国時代以降には文献にも登場し、江戸時代には右左口は宿場として栄えたという。写真7に見えるように、右左口の宿場は、今日に至まで間口が狭く奥行きが深い地割りが残り、これに沿った家屋が並んでいる。いまだこの地区では、小字とは別の「下宿」「上宿」などという通称がふつうに使われている。県内でいち早く古墳群がつくられていることや古道の存在から、この付近が古より甲府盆地から静岡県側への出入口となっていたことがうかがえる。



第4図 上野原遺跡周辺鳥瞰図

第3章 遺構と遺物

第1節 道路関連遺構

ここで道路関連遺構と判断したものには、ふたつの形態がある。一方は、幅約1mの浅い溝状のもので、底部付近が硬化したものであり（SF1・SF4）、他方は、ほぼ平坦で良好な住居跡の床面以上に非常に硬化した面が続くものである（SF2・SF3・SF5）。後者については、耕作を取り除くと、すぐに黒褐色土の硬化面が現れ、当初は壁などが失われた住居跡の床面と理解して調査を進めた。しかし、硬化面はかなり広範囲に及ぶため、次の3要素を目安に硬化面を吟味して検討を進めた。

- ・「強い硬化がある」
- ・「とくに黒味の強い黒褐色土（耕作土とは際立って違う）」
- ・「床面によく見られるような微妙な凹凸がある」

しかし、1軒と認定するには大きく、また重複と考えるにしても個々の住居跡の境目がない。また、焼土も少なく炉跡もピットもない。範囲が拡大するにつれて、ゆるやかな傾斜があることなど、床面として不自然なことがはっきりしてくる。

硬化面は細長く続くことから、巨大な遺構である。しかし、長軸方向にも傾斜をもち、また短軸方向にも傾きまたテラス状に段々をなしていることからすると、建築物と考えるのも不自然である。この点から、道路に関連して踏み固められたものと理解するのが妥当であると考えられる。また、今回の調査原因である国道は古い街道の「中道往還」に由来するものである。そして、調査地点の南東には、現在も宿場の町並みを色濃く残す「右左口（うばぐち）」の宿がある。かくて、現国道は遺跡を削り取った切り通しの下であるが（写真5）、「古道」が台地上を通り、その痕跡を留めていると理解される。

SF1 道路関連遺構

形態：浅い溝状

断面形：底面は浅いU字形

長軸方向：おおよそN-27° - E

長さ：23.6m（現存）

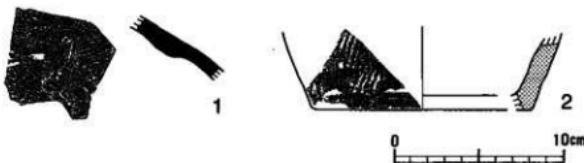
幅：1.05~1.33m

深さ：30cm（現存）

重複関係：SB3住居跡（縄文時代）を切っている。

ジョレンがけによる精査中に幅約30~50cmほどの黒色土の硬化面を確認する。この黒色土の下には、暗オリーブ褐色土が堆積し、底面付近の地山も硬化していた。また、この地山はシミ状に変色して黒色化していた。硬化程度は非常に強く、住居跡の良好な床面に匹敵するほどのものである。踏み締めるられたものと判断される。長軸方向はやや湾曲するも、調査区とほぼ平行し、南に存在するSF4に形状が類似し、同一の遺構である可能性が高い。

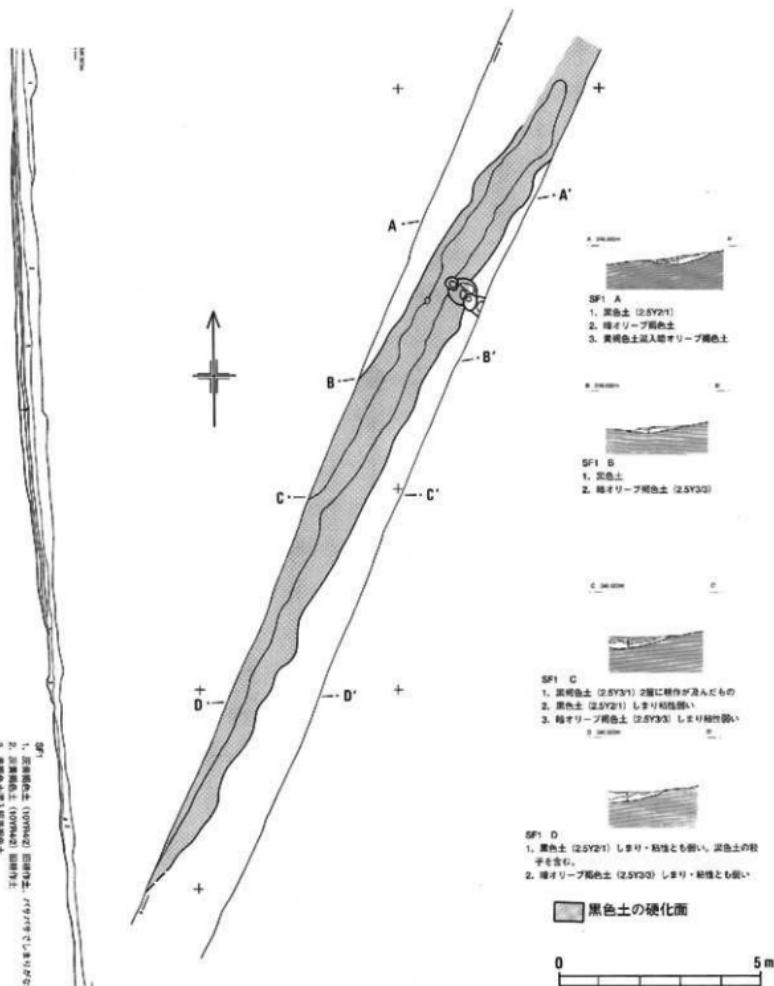
出土遺物：第5図1は須恵器片、壺あるいは壺の肩部と思われる。2は中世陶器片の底部、底部からの立ち上がりに稜をもつ。今回の調査で出土した中世陶器の中では、この



第5図 SF1 道路関連遺構出土遺物

破片のみが浅黄色の特異な色調を呈す。

他には図示出来なかつたが、平安時代と思われる土師器1片・中世陶磁器1片・綠釉陶器1片などの細片が出土した。これらの出土遺物から、SF1道路関連造構は中世に属するものと考えられる。



第6図 SF1 道路関連造構



写真 8 SF 1 道路関連構造（北から）硬化面検出状態



写真 9 SF 1 道路関連構造（北から）完掘

SF 2 道路関連遺構

形態：ほぼ平坦な硬化面

断面形：ほぼ水平であるが、まとまりごとに段差をもつ。

長軸方向：おおよそ N-2° - W

長さ：16.6m（現存）

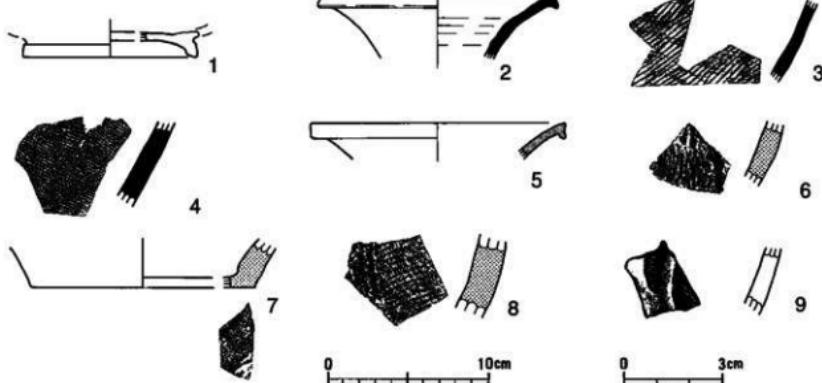
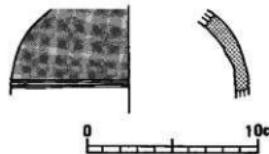
幅：2.9m（SF 5 を除いての最大値）

重複関係：類似した形態の SF 5 遺構に切られる

耕作土を取り除くと、すぐに黒褐色土の硬化面が現れた。その特徴はとして「強い硬化がある」「とくに黒味の強い黒褐色土」「堅穴住居跡の床面によく見られるような微妙な凹凸がある」などが認められた。そこで、壁などが失われた住居跡の床面と考えて調査を進める。しかしながら広範囲に及ぶため、1軒と認定するには大きく、また重複と考えるにしても個々の住居跡の境目がない。調査が進展し、さらに硬化面の範囲もかなり広がるが、焼土も少なく炉跡もピットもない。ゆるやかな傾斜があって、床面としては異例であり、住居跡と断定する要素に欠けることがはっきりする。

非常に住居跡床面以上に良く硬化していることと非常に細長いことから、道路に関連する遺構の一部と考えられる。また、硬化面が南北に長く伸び、各硬化面の連続状態から四つの面に分けることができた。第9図は、当初に確認した硬化部分の範囲である。第10図は硬化部分を残し、その周縁を掘り下げ、さらに硬化面を露出させた状態である。

出土遺物：硬化面に明確にめり込んだ状態で出土したのが（写真11）、第7図1の三筋壺の肩部の破片である。この破片にはぶい赤褐色の地に灰緑色の灰釉が掛かったもので、不規則な2条の沈線が横走している。常滑の三筋壺の肩部であり、12世紀代に属するものと考えられる。第8図1は土器片器、高台付窓の底部と考えられる。8世紀後半～9世紀後半に属すると思われる。2は須恵器の口縁部片、広口壺もしくは長頸瓶と考えられる。3・4は須恵器の胴部破片。5は灰釉陶器の口縁部片、長頸瓶 第7図 SF 2 道路関連遺構出土遺物（1）



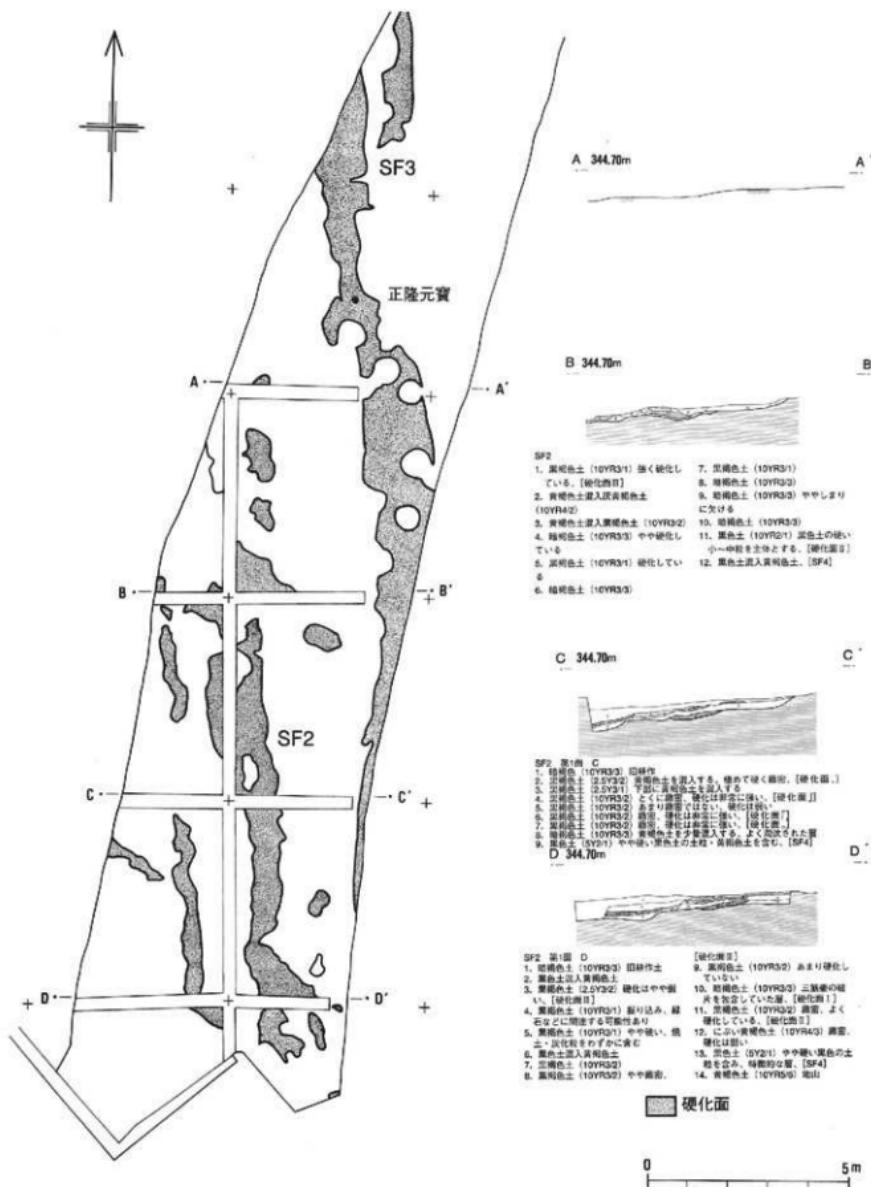
第8図 SF2道路関連遺構出土遺物（2）



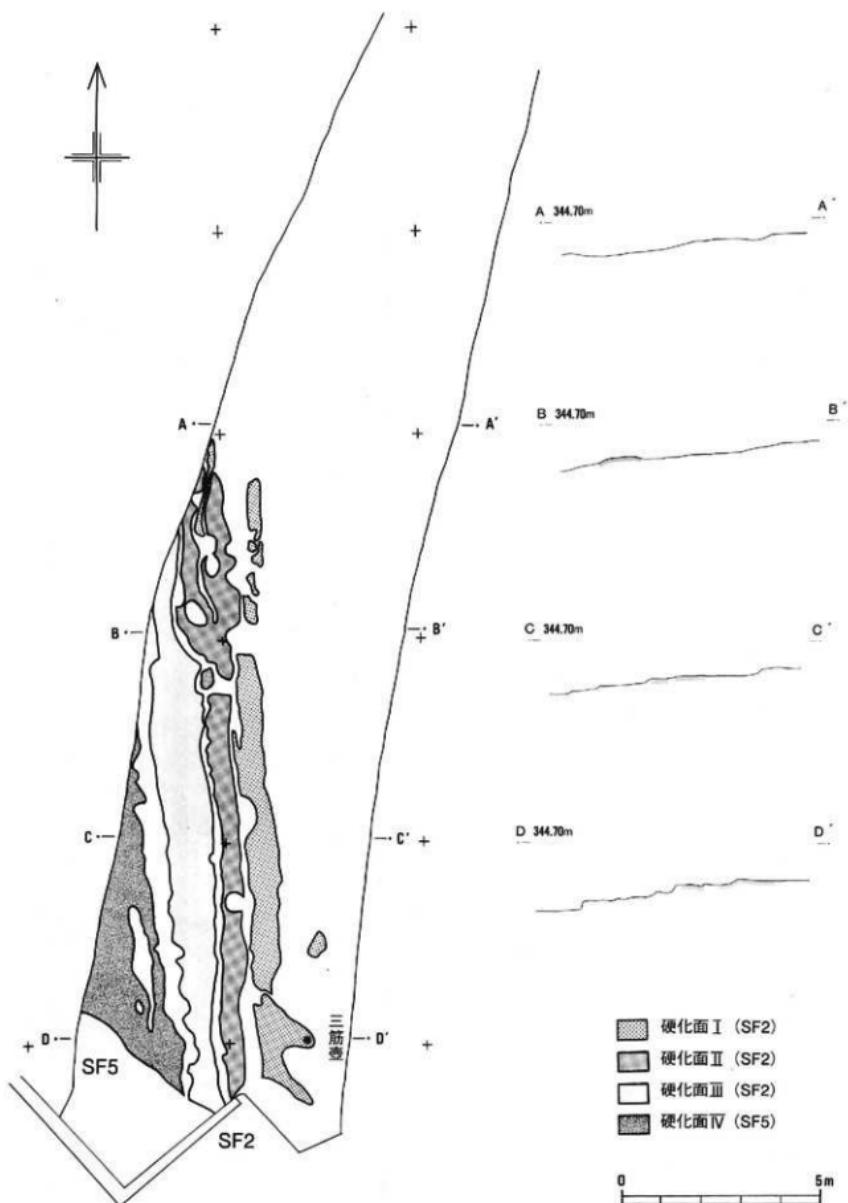
写真10 SF 2・SF 3 道路関連遺構（南から）硬化面検出状態



写真11 SF 2 道路関連遺構 三筋壺破片出土状態



第9図 SF2・SF3構造



第10図 SF 2・SF 5 遺構



写真12 SF 2 道路関連遺構（南から）硬化面検出状態



写真13 SF 4・SF 5 道路関連遺構（南から）硬化面検出作業



写真14 SF 4 · SF 5 道路関連遺構（南から）硬化面検出状態



写真15 SF 4 · SF 5 道路関連遺構（南から）礫を除去後



写真16 SF 4 道路関連遺構 覆土断面（南から）

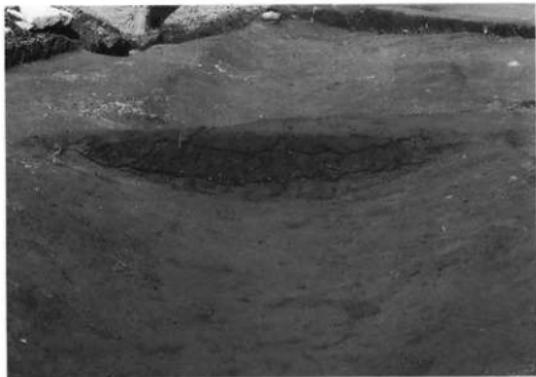


写真18 SF 4 道路関連遺構 覆土断面部分（南から）



写真17 道路関連遺構 実測・清掃作業

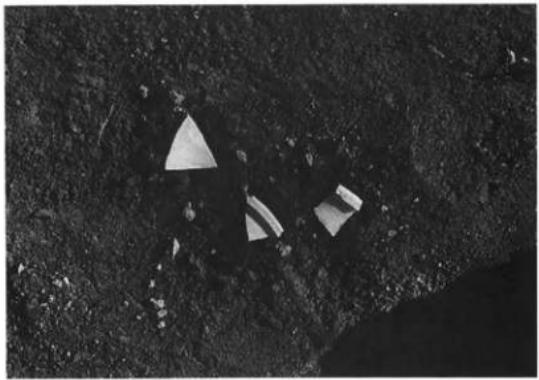


写真19 SF 2 道路関連遺構 遺物出土状況

と考えられる。6は中世陶器片、乳白色と緑色の釉薬が掛かる。7は中世陶器底部片、底部が鋭く立ち上がる。8は常滑焼破片、極暗赤褐色の地に釉がひき筋掛かっている。9は中国産の青磁片、鍋連弁文の一部と考えられる。また、硬化面に確実に伴うと断定できないが、硬化面直上の耕作土中から、中国銅「正隆元寶」1点が出土している。正隆元寶は、満州の女真族の「金」王朝のもので初鋤が1157年である。これらの出土遺物から、S F 2 道路関連遺構は中世に属すと考えられる。とくに、三筋壺片の出土状態は重要で、これから12世紀以降に利用されていたと考えられる。



写真20 正隆元寶（実物の2倍）

S F 3 道路関連遺構

形態：ほぼ平坦な硬化面

断面形：不定形

長さ：22.6m

幅：1.8m

調査の経過は S F 2 道路関連遺構と同様である。地表からも比較的浅く耕作による影響をもっとも強く受けるため、S F 2 道路関連遺構などに比べると遺存が悪く、全体の形状を推定することが難しい。また、中央部分では円形の攪乱をかなり受けている。

出土遺物：出土したのは細片ばかりであり、またこの遺構に明確に伴う遺物は確認できなかった。

S F 4 道路関連遺構

形態：浅い溝状

断面形：底面は浅いU字形

長軸方向：およそN-5°-E

長さ：24.3m（現存）

幅：1.6m（最大）

重複関係：S F 4 の上部に S F 2 道路関連遺構が構築されている。

S F 2 道路関連遺構の黒褐色土の硬化面と、その下のにぶい黄褐色土や暗褐色土を取り除くと、この S F 4 道路関連に特徴的な黒色土でやや硬い黒色土粒を含む土層が認められた。S F 2 と S F 4 との間は、硬化面や黒色・黒褐色土の堆積が連続せず、中间に暗褐色土の堆積が存在する。肉眼観察ではこの暗褐色土層は自然堆積と判断された。つまり、これらの硬化面の利用が時間的に連続するのではなく、断続的であると考えられる。

断面形状は S F 1 道路関連遺構に類似し、現状の国道建設によって削平された部分を推定すると、S F 1 道路関連遺構と同一遺構の可能性が高い。

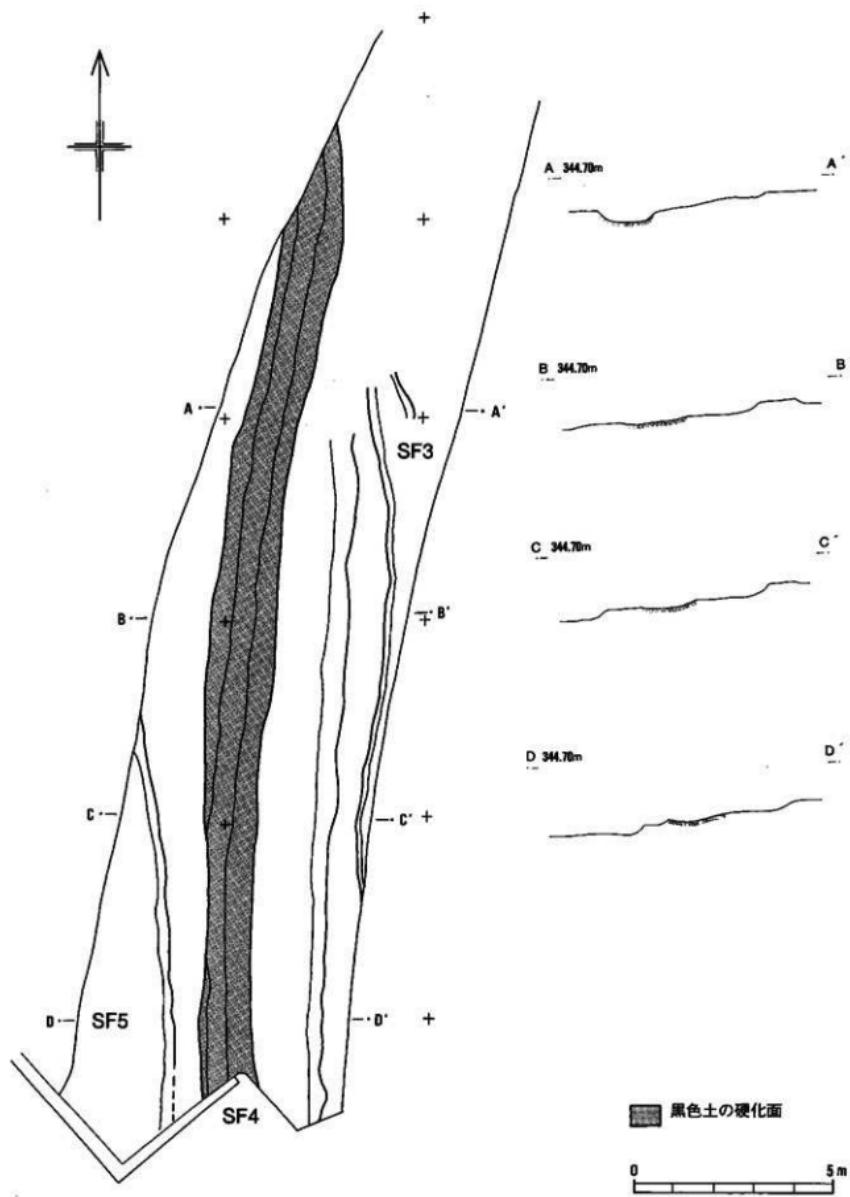
出土遺物：細片ばかりで、からうじて実測できたのは第11図1・2の2点である。ともにたたき目をもつ須恵器片であり、両者はたたき目・胎土・色調が類似し、同一個体である可能性が強い。また、図示できなかつたが、これに類似した細片が7点出土している。



第11図 SF 4 遺構出土須恵器

S F 5 道路関連遺構

形態：ほぼ平坦な硬化面



第12図 SF 3 · SF 4 · SF 5 道路関連造構

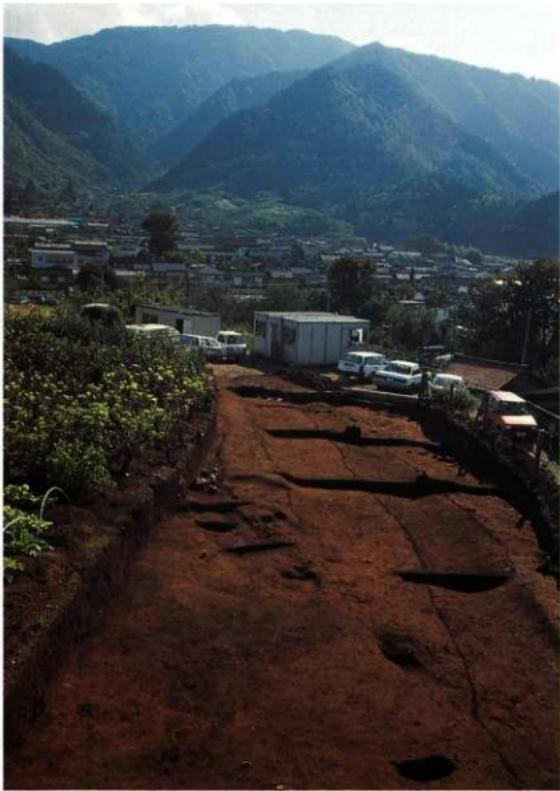


写真21 SF 4 道路関連構造（南から）



写真22 SF 4 道路関連構造（南から）土層観察ベルト除去後

写真23 道路関連遺構 完掘（真上から）



写真24 道路関連遺構 完掘（北から）



断面形：ほぼ平坦

長軸方向：おおよそN-2° -W

長さ：9.4m（現存）

幅：2.5m（現存）

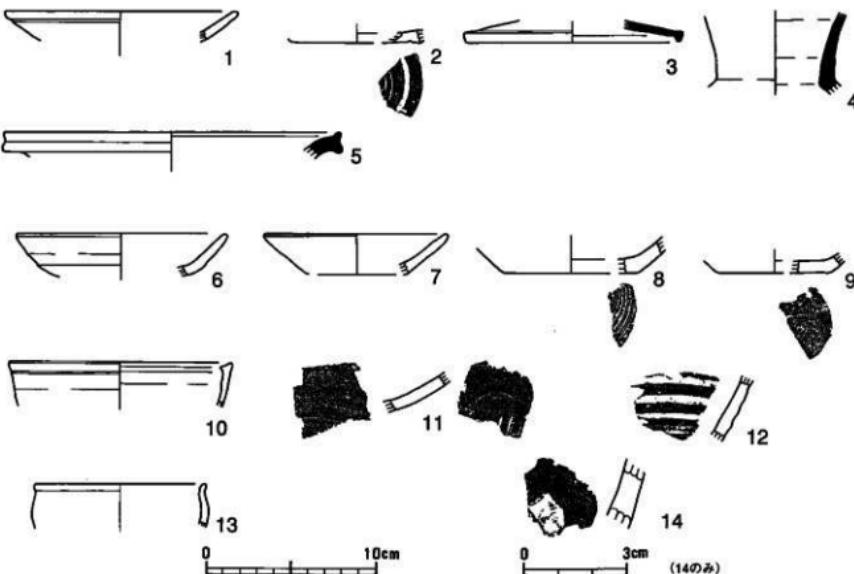
重複関係：S F 2を切る

S F 2道路関連造構とはほぼ平行している。硬化も強く、連續性も良い。S F 2道路関連より新しいことから、このS F 1～5道路関連造構の類では最も新しいと考えられる。しかし、かなり慎重に注意したが、磁器などの破片はまったく見られなかったことから、江戸時代以前に遡る可能性が高い。

第2節 造構外出土の奈良・平安時代以降の遺物

包含層などの出土遺物で、奈良・平安時代以降の遺物を以下に示す。この時期に該当する造構は、道路関連造構のS F造構以外には確認されておらず、これらの遺物は道路関連造構に伴う可能性が高いと考えられる。また新しい耕作土や擾乱土以外からは、近世・近代の陶磁器片などは出土しなかった。このことは道路関連造構が近世・近代以前のものであることを傍証するものと考えられる。

第13図1は土師器、坏。2は土師器、削り出し高台底部。1・2は平安時代に属すと思われる。3は須恵器、蓋。4は須恵器、長頸瓶の颈部。5は須恵器、長頸瓶の口縁部。6は京都系の手づくねカワラケ、13世纪に属する。7は土師質土器。8・9は土師質土器。系切り底。10は筒型香炉、灰黄色の胎土の両面に灰釉が掛かっている。古瀬戸の後期III期に属すると思われる。11は古瀬戸の鉢し皿。灰黄色の胎土に灰釉。見込み部は無施釉でかろうじて刻みが認められる。後III期。12は古瀬戸の大皿と思われる。灰黄色の胎土に灰釉。13は天目茶碗と思われる。口唇がわずかに外反し、灰白色の胎土に鉄釉。14は灰白色の胎土の青磁で中國産と思われる。



第13図 遺構外出土の奈良・平安時代以降の遺物

第3節 縄文時代の造構と遺物

S B 1 住居跡

位置：2-K-2 G

重複：S B 4 土坑・S P 5・S P 23 土坑に切られる

形状・規模：円形？

床・壁：一部硬化面あり、壁高13cm

炉：明確な炉は検出できなかった

時期：中期中葉と考えられる

造構確認段階で、不明瞭なプランを確認し、遺物がまとまって出土した。北壁を確認したが、床面の硬化は弱く南壁を確定することができなかった。恐らく S P 23 土坑付近までが住居範囲になるものと推定される。また焼土は散布のみで炉とは判断できなかった。

出土遺物：第15図1は横走する細い隆帯の両脇を先端がとがったベン先状工具による押し引きを施す。中期中葉。2はキャリバー型口縁部、深い沈線によって隆帯を表出し、指頭圧痕による交互刺突、ヘラによる矢羽状の刻みが施される。井戸尻期。3は指頭圧痕が付けられた隆帯があり、その両脇に角押文・爪形文の連続押し引きが施されている。また、縦位に結節回転文が見られる。中期中葉。4は幅広と幅狭の連続爪形文が施される。中期中葉。5は口縁部の無文の太い隆帯があり、その下にヘラ状工具により刻みを付けられた隆帯が横走する。中央に穴をもち、同様の刻みをもつ円形の貼付文が見られる。藤内期。6は連続爪形文が一部見られ、沈線による三叉文や円形の刺突が施される。井戸尻期。7は矢羽状の刻みをもつ隆帯があり、これに沿って疑似隆帯が連続し、一部には交互に刺突が施される。藤内期。8は縄文帯の脇に幅広の連続爪形文が施される。藤内期。9は隆帯脇に幅広の連続爪形文が施される。中期中葉。10はパネル文が見られる。刻みをもつ隆帯脇に疑似隆帯が巡り、区画内を沈線で充填される。藤内期。11も10と同様なパネル文が見られ、屈曲底である。藤内期。12~14は幅広の沈線と細い沈線が施される。曾利期。12・13は曾利V期。15は条線が施される。曾利期。16は曲線的な区画に磨削縄文が施される。加曾利E期末。

S B 2 住居跡

位置：1-J-19 G

重複：S F 1 造構に切られる

形状・規模：円形、長軸4.86m、短軸2.06m

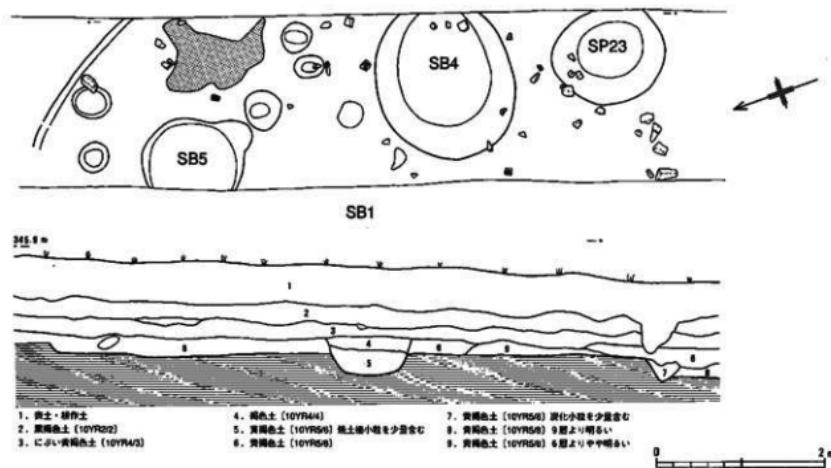
床・壁：地山床（にぶい黄褐色土）、壁高25cm

炉：地床炉、規模77cm×50cm、深さ14cm

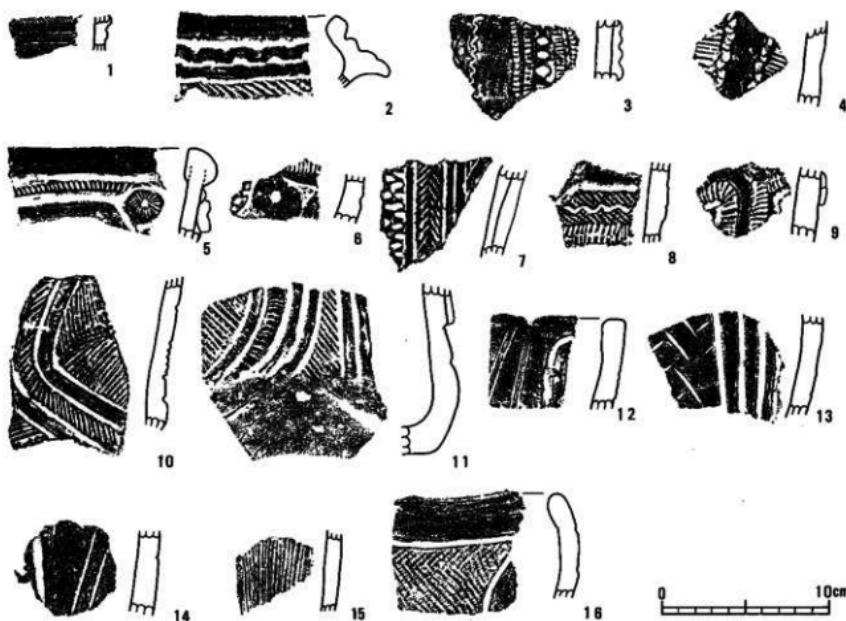
時期：中期中葉（井戸尻期）

S F 1 道路関連造構の調査段階で、S F 1 造構の下から発見される。重複はしていたものの、幸いに S F 1 造構が深く及んでいないために、住居跡のプランを把握することができた。

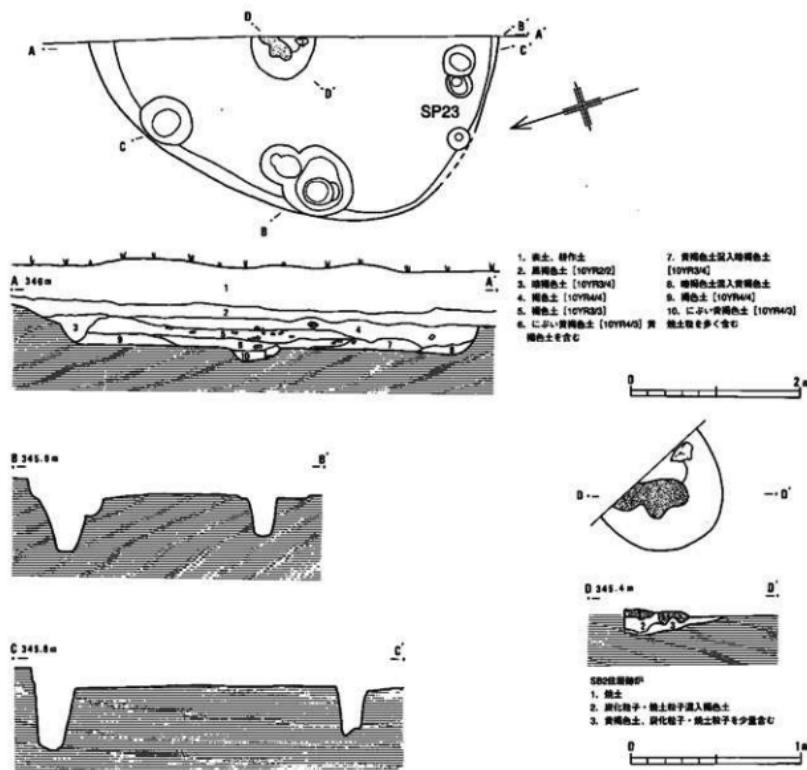
出土遺物：第17図1・2は隆帯で区画され沈線で充填された4単位の波状口縁部で、部分的に隆帯上に刻みが付けられる。藤内期。3は1・2と類似した口縁部をもち、その下に精円横帯文が付けられる。隆帯上には部分的に太い刻みが付けられる。藤内期。4は胴部が強く括れ、底部が屈曲するキャリバー形土器の上半部である。3単位の波状突起をもち、主に隆帯で区画され、その内部を太い沈線などで充填される。井戸尻期。5は大型のキャリバー形土器の口縁部、刻みをもつ太い隆帯で区画され、太い沈線で充填される。井戸尻期。6は浅鉢の口縁部、隆帯脇に幅広の爪形文を施す。また区画内の隆帯上には刻みが付けられている。藤内期。第18図7は内湾する無文の口縁部を持つ大型のキャリバー形土器、口縁部上には環状把手が付けられ、その上にはヘビを模したと思われる刻みをもつ隆帯が付けられている。刻みをもつ隆帯と沈線によって文様を表出している。井戸尻期。8は刻みをもつ隆帯によって渦巻き文が付けられた把手が1つある。また胴部にも刻みをもつ隆帯により区画され沈線で充填されている。井戸尻期。



第14図 SB 1 住居跡・SB 4 土坑・SB 5 土坑・SP23



第15図 SB 1 住居跡出土土器



第16図 SB 2住居跡

第19図9は結節浮線文が2条横走する。十三菩提期。10はかなり磨滅しているが、縄文が施されている。中期初頭か。11は耳たぶ状の把手部分。前期末～中期初頭。12はキャリバー形土器の口縁部、突起が付けられ、斜行沈線が施される。五領ヶ台期。13・14は隆帯脇にペン先状工具による連続刺突が見られる。15は低い隆帯上に幅広の連続爪形文、その外側に2本の角押文が施される。角押文による鋸齒状文も見られる。16は深い爪形文が施される。17は幅広の連続爪形文とペン先状工具による連続刺突が施される。18は隆帯脇に連続爪形文が施される。19は隆帯脇に連続爪形文が施されるが、その間隔はやや粗い。20～24・28は低い隆帯上に幅広の連続爪形文が施される。21はペン先状工具による連続刺突文も見られる。25は疑似隆帯に刻みと交互刺突が見られる。26は疑似隆帯により区画文をつくり、その中の沈線や爪形文で充填する。27は沈線により三叉文が表され、ペン先状工具による連続刺突文や爪形文で縁取られている。29～31は隆帯上に連続爪形文が施されるもの。藤内・井戸尻期。30は低い隆帯上に縄文が施されている。32は隆帯上に粗い刺突が施されるもの。33は隆帯脇に連続爪形文が施される。縄文も施される。34は隆帯上に矢羽状の刻みと半截竹管による集合沈線が施される。35～37は刻みの施された隆帯や疑似隆帯によるパネル文が見られるもの。藤



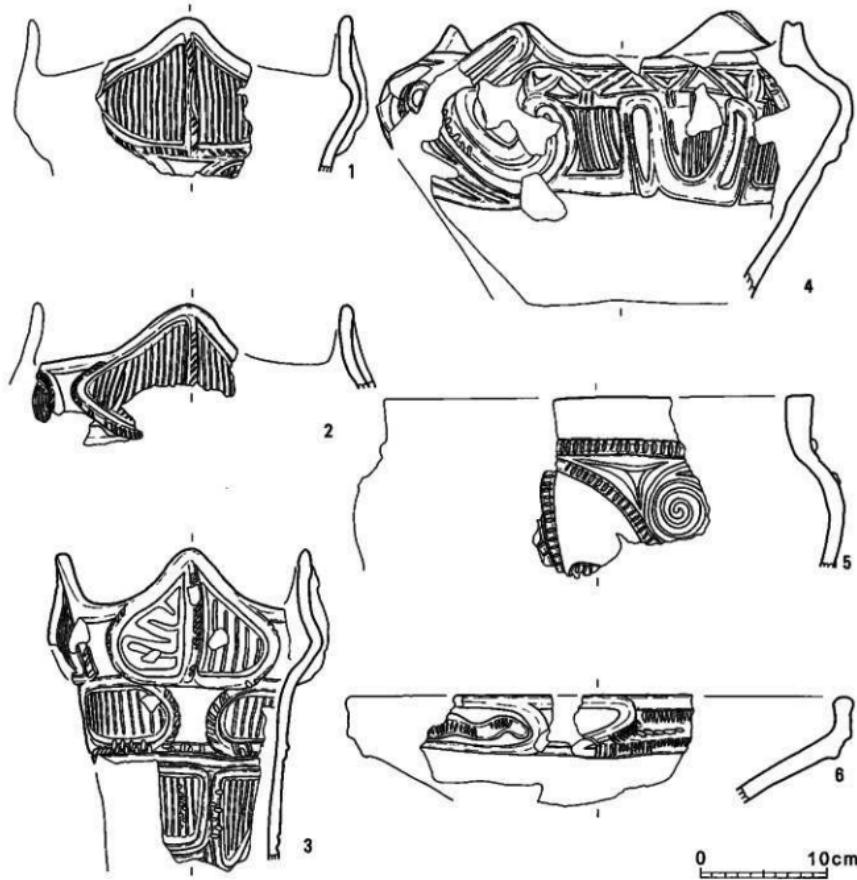
写真25 SB 2 住居跡 遺物出土状態



写真26 SB 2 住居跡 遺物出土状態部分



写真27 SB 2 住居跡付近 完掘



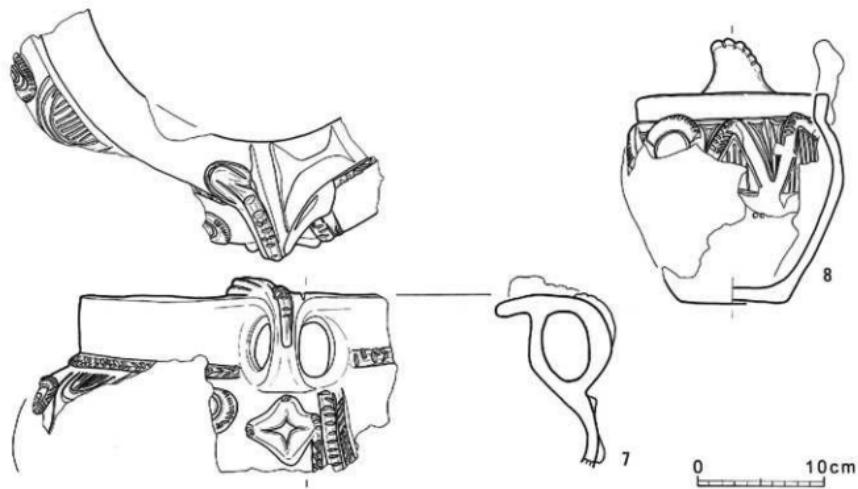
第17図 SB 2 住居跡出土土器 (1)

内期。38~41は口縁部で太い沈線が施される。40は半截竹管による集合沈線。42・43は太い沈線によって曲線的様を表出する。井戸尻期。

第20図44は竹管押し引きによる疑似隆帯が充填された捺円横帯区画文が見られる。藤内期。45は深鉢の括れ部、器指頭圧痕が施された太い隆帯と太い沈線が継位に施される。46は太い沈線で充填された区間文が認められる。藤内・井戸尻期。47・48は同一個体で、刻みをもつ隆帯で横帯区画文が表出される。49・52は様々な刻みをもつ隆帯が付けられ、その間を太い沈線で三叉文などが表出される。50は隆帯上には深い刻みと隆帯脇への連続爪形文が見られる。49・51・53は太い隆帯に大きな指頭圧痕を付け、その中に沈線を施したモチーフが見られる。51は波状口縁部波頂部。54は断面がほぼ三角形の隆帯が3条添付されたもの。55は継位の隆帯や繩文が見られる。56~59は指頭圧痕や刻みなどを付けられた太い隆帯をもつもの。60は隆帯や疑似隆帯上に細かい沈線を施されたもの。61・63・66は環状の粘土紐に刻みを付けた突起をもつ。62は隆帯



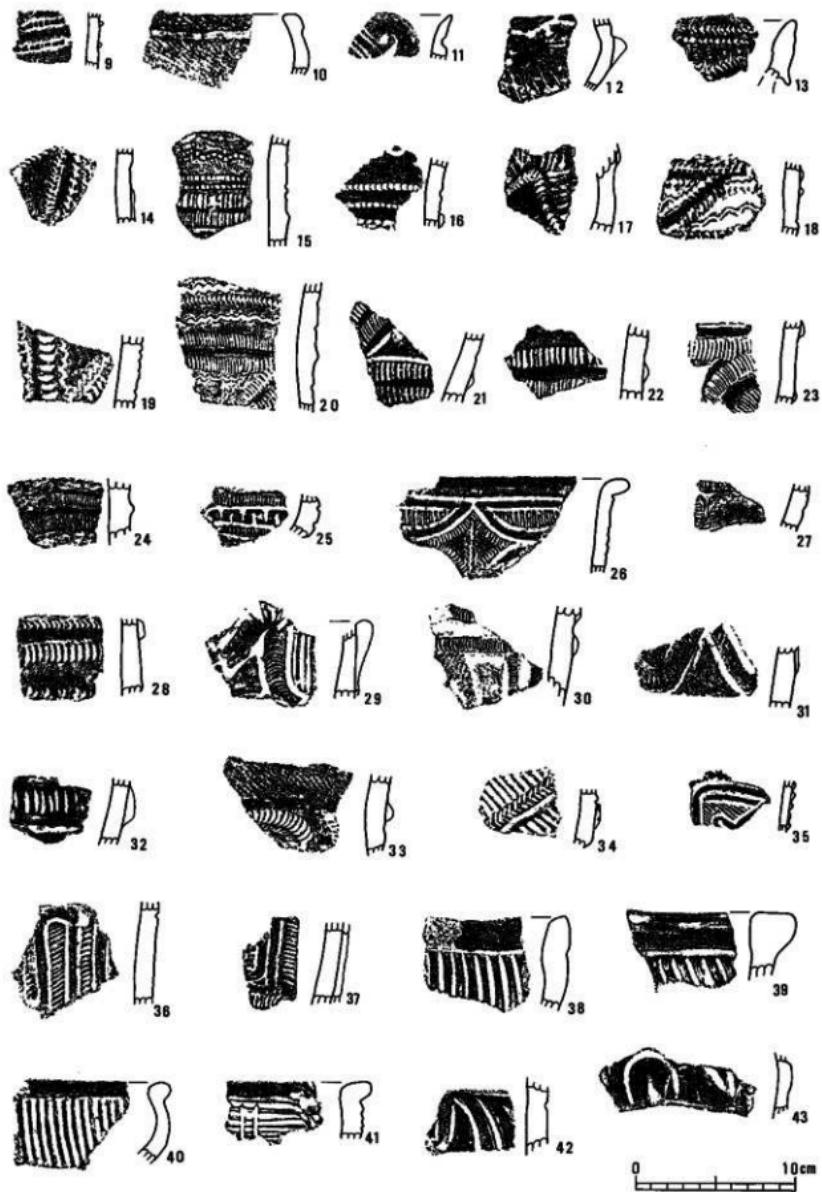
写真28 SB 2 住居跡出土土器 (1)



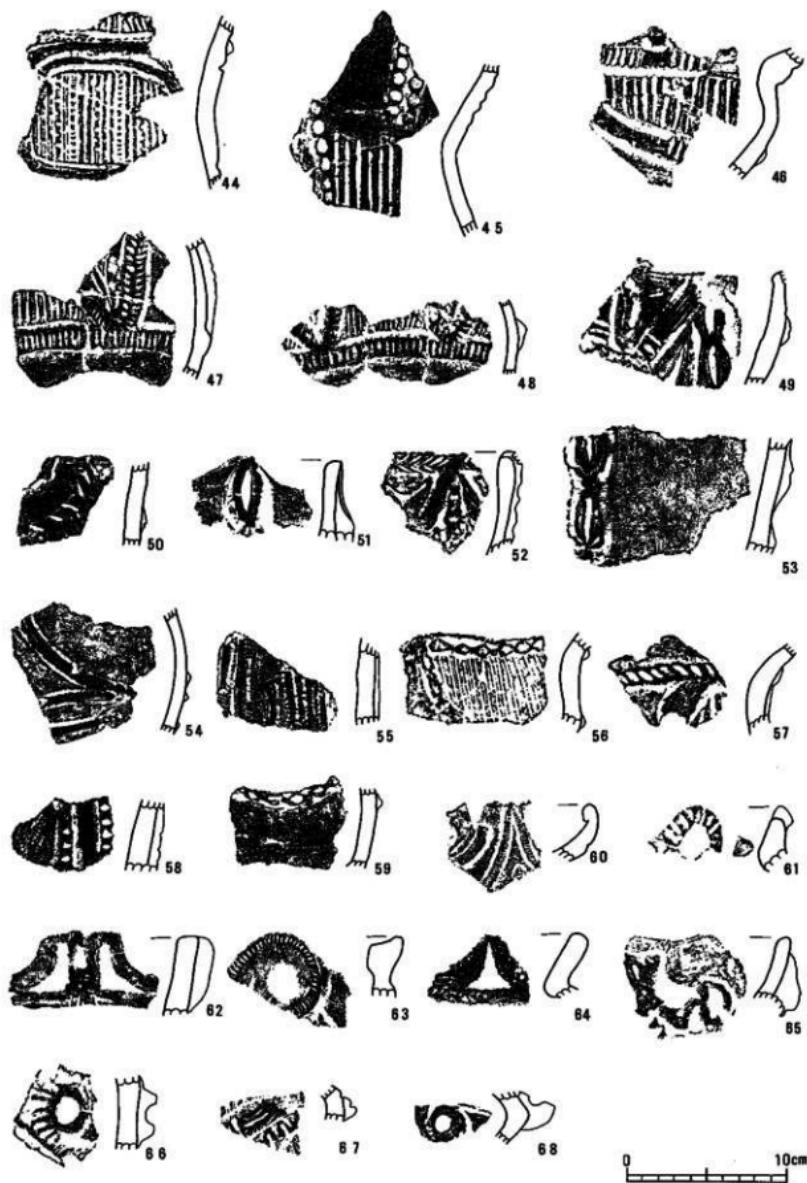
第18図 SB 2 住居跡出土土器 (2)



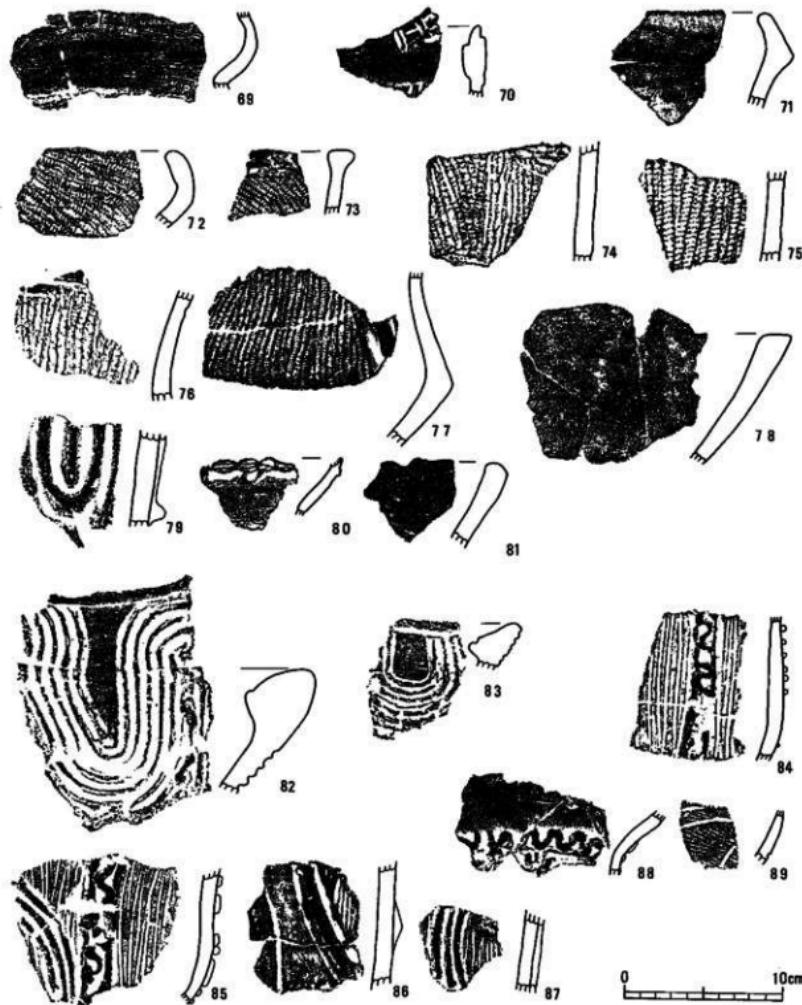
写真29 SB 2 住居跡出土土器 (2)



第19図 SB 2 住居跡出土土器 (3)



第20図 SB 2 住居跡出土土器 (4)



第21図 SB 2 住居跡出土土器 (5)

と沈線によって、角形の突起を表出した。64は隆帯によって波状突起を表出す。65は刻みをもつ太い隆帯を貼り付けた口縁部。67は疑似隆帯に交互刺突などの刺突を施す。68は口縁部屈曲部に渦巻き状の把手を貼り付ける。

第21図69は無文で内湾し、この上で口縁部は外反する。70は波状口縁部の一部、深い沈線が見られ、内面には横位の太い隆帯が付けられる。71は内湾する無文の口縁部。72は縄文が施された内湾する口縁部。72～77は縄文が施される。77は強く屈曲する底部付近。78は波状口縁で切り込みが見られる。浅鉢と考えられ

る。79は隆帯により褚円形の文様が表現される。80は隆帯に指頭圧痕が付けられ、さらに圧痕中に沈線を施された浅鉢。81は口唇に刻みが施された浅鉢。82・83は疑似隆帯により重弧文が表出される。曾利II期。84・85は縦位の条線の上に粘土紐が添付したもの。86・87は隆帯で区画され、条線で充填されたもの。88はソーメン状の粘土紐が貼付された口縁部。89は縄文を施文した上に沈線を施したもの。

S B 3 住居跡

位置：1-H-5G、S P 34・S P 35に切られる

形状・規模：円形 長軸4.98m、短軸2.73m（現存）

床・壁：

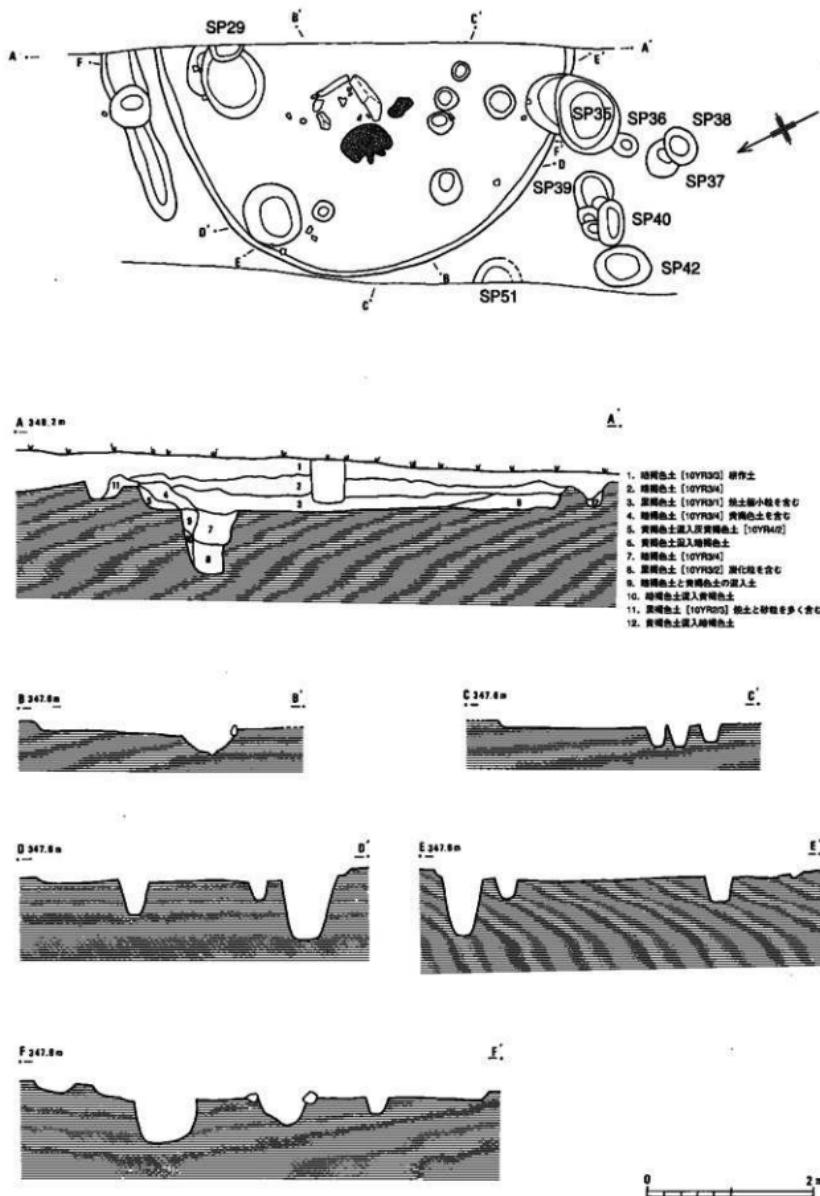
炉：石囲炉、76cm×76cm、深さ30cm

時期：井戸尻期

今回の調査では範囲も広く、かつもっとも遺存状態が良く、好条件で調査できた住居跡である。床面も良くしまり、掘り込みも深く柱穴と判断できるピットも7基を確認できた。また、炉は柱状の石で3方に置いた石囲炉が住居跡中央から発見された。焼土は炉内よりも、石がない東側に多く検出された。断面観察では、この搔き出された焼土を切って、焼土を多く含んだ黒褐色土の堆積があった。また、炉の内壁も熱を受け地山まで良く焼成されていた。この内壁と縁石の断面の位置関係を見ると、内壁の上に縁石が大きくせり出している。内壁が焼成を受けた後に、縁石が置かれたか移動されいるものと考えられる。炉が繰り返し使用されていることが認められた。覆土は2層が暗褐色土層や3層が黒褐色土層と、地山より色調が暗く判別が容易であったが、壁際の覆土は地山と類似し壁の確認がやや困難であった。

出土遺物：第24回1は4単位の波状突起をもつ深鉢である。隆縫などの貼り付けはなく、縄文のみが施文されている。2は強く屈曲するキャリバー形土器の口縁部である。太い隆縫と沈線によって環状の曲線的な文様などが表出されている。井戸尻期。

第25回3はキャリバー形土器の口縁部で器壁は薄い。縱方向に貼付された粘土紐が4本、その下には横位の刻みをもつ細い隆縫が認められる。前期末か。4は隆縫の脇に幅広の連続爪形文とベン先状工具による連続刺突文が見られる。中期中葉。5は隆縫脇に連続爪形文が施され、その上には2本の沈線が見られる。6は疑似隆縫の脇に連続刺突が見られる。7は隆縫脇に連続爪形文が施される口縁部である。8は無文の口縁部下に横位の隆縫が付けられ、交叉刺突と矢羽状の刻みが施される。9・10は矢羽状の刻みをもつ隆縫が縦位に走り、沈線による施文が見られる。11は刻みをもつ疑似隆縫が付けられる。12は刻みをもつ隆縫が付けられる。13は矢羽状の刻みをもつ隆縫がみられる口縁部。14は刻みをもつ隆縫があり、その下に縄文が施文されている。キャリバー形土器の口縁部下部。15は刻みをもつ隆縫が付けられている。16は矢羽状の刻みをもつ隆縫が縦位に走り、沈線による区画や刻みをもつ疑似隆縫が見られる。17は刻みをもつ隆縫が付けられるキャリバーオロ縁部。18は矢羽状の刻みをもつ隆縫が走り、沈線による施文が見られる。19は刻みをもつ隆縫が縦横に付けられるくびれ部。20は竹管で刺突された隆縫が付けられる。21は隆縫上に連続爪形文が施される。22は縦位の隆縫に刺突が見られる。23・24は隆縫上に沈線が施されるもの。25は口縁部無文帯が巡り、その下に隆縫の一部が見られる。26は刻みのない隆縫が立体的に施されるもの。27は指頭圧痕をもつ隆縫が施される。28は刻みのない隆縫が見られる。口縁部の小突起から延びる隆縫と考えられるが、小突起は欠損している。29は疑似隆縫に刺突をもつもの。30は竹管による連続内を縦の沈線で充填するもの。図は逆転しているが、器台と考えられる。31・32・34は太い沈線が施され、隆縫が一部認められる。33は沈線区画内を縦位の沈線で充填するもの。35は浅鉢の口縁部と考えられる。36は細かいR Lの縄文が施される口縁部。37は沈線による刺突をもつ単位の大きな押圧隆縫が見られる。縦方向の縄文が充填される。38は一部に刻みをもつ隆縫が施される浅鉢。39は屈曲底をもつ深鉢の胴部下半、縦位に撲糸文が施される。40は縄文が施される。



第22図 SB 3 住居跡



写真30 SB 3 住居跡 遺物出土状態（1）



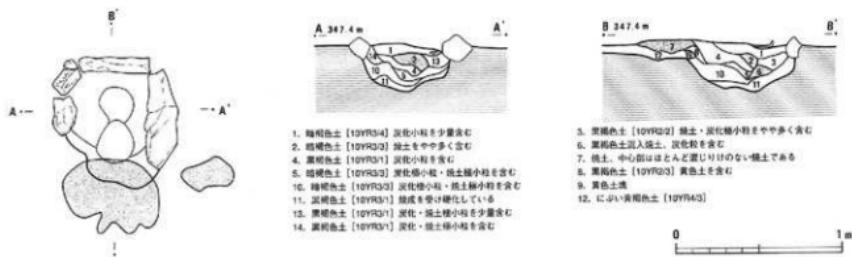
写真31 SB 3 住居跡 遺物出土状態（2）部分



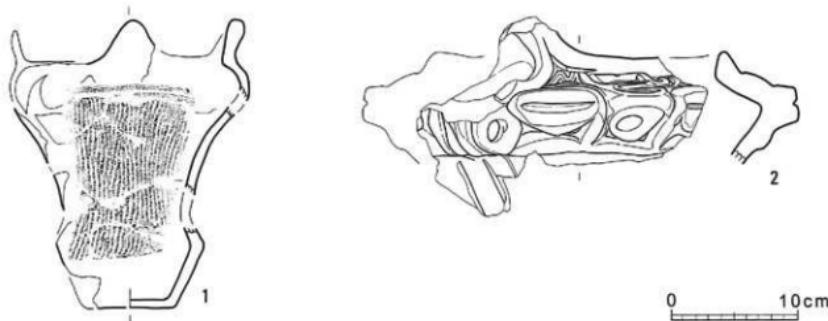
写真32 SB 3 住居跡 遺物出土状態 (3)



写真33 SB 3 住居跡 完掘



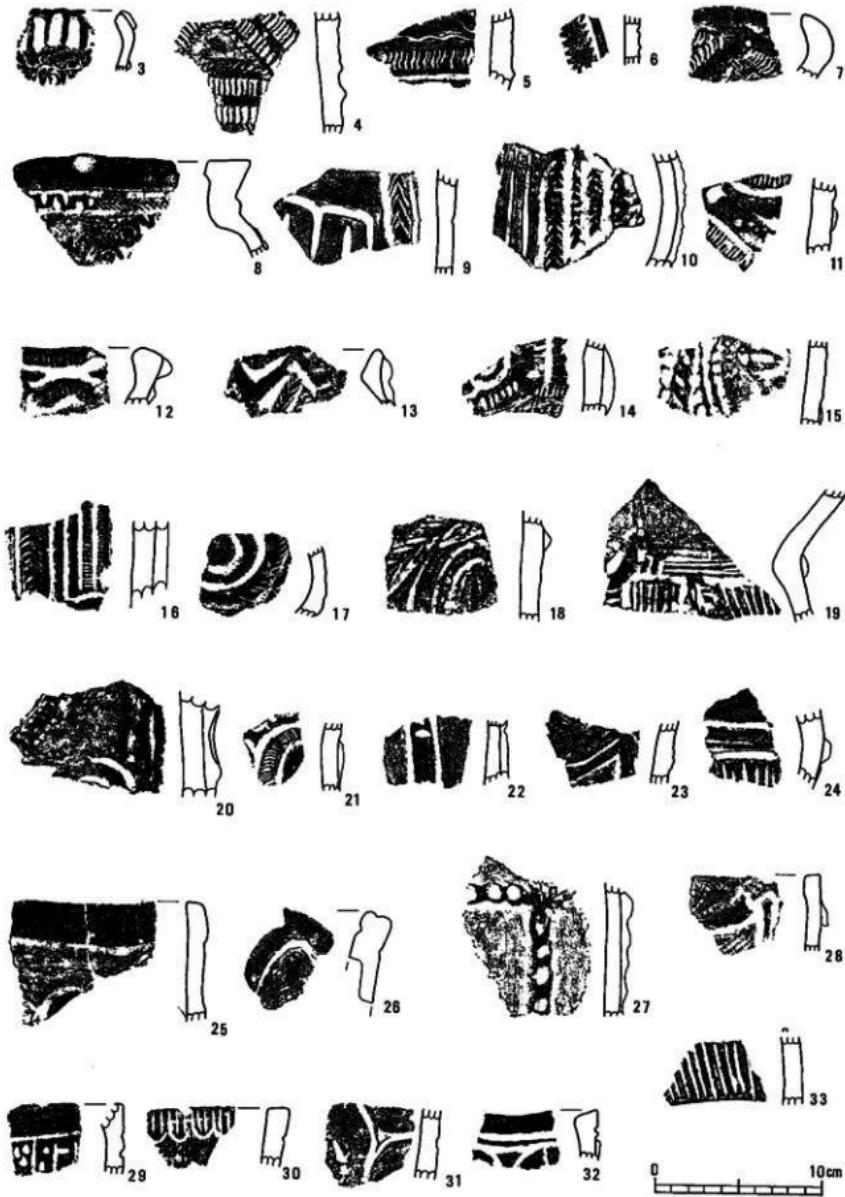
第23図 SB 3 住居跡炉跡



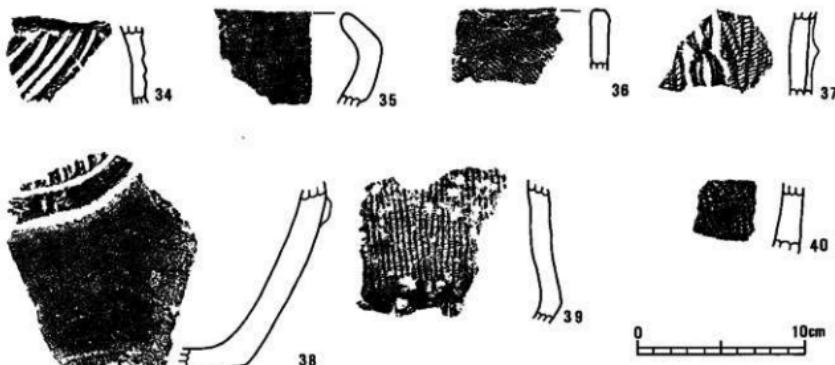
第24図 SB 3 住居跡出土土器 (1)



写真34 SB 3 住居跡出土土器



第25図 SB 3 住居跡出土土器 (2)



第26図 SB 3 住居跡出土土器 (3)

SB 4 土坑

位 置: 2-L-3 G

重 複: SB 1 住居跡を切る。

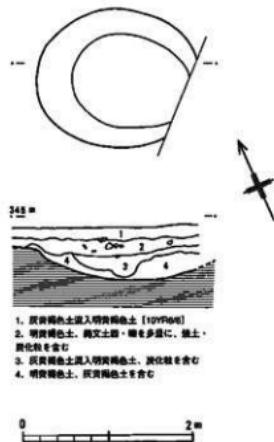
形状・規模: 楕円形、長軸1.72m (現存)、短軸1.66m、深さ32cm

時 期: 藤内期

プラン確認の段階は、直径約3mほどの遺物集中があり、SB 1 住居跡と重複する別の住居跡と理解しSB 4 住居跡と命名した。しかし、遺物を取り上げながら掘り下げるに、プランは縮小し大型の皿状の楕円形の土坑と判明した。遺構名は当初のSB 4を使用した。覆土は全般にしまりがよく、色調は地山よりわずかに暗いと感じる程度であった。遺物は上層から多く発見された。

出土遺物: 第29図1 大型の円筒形の深鉢、竹管の刻目をもつ隆帯によって基本的な文様が構成される。楕円区画文が横位に連続し、また斜行する隆帯も見られる。藤内期。

第28図2は縦横に竹管による浅い沈線が施される。五領ヶ台期。3はキャリバー形土器の口唇部で横位の沈線による鋸歯文が施される。五領ヶ台期。4・5は隆帯脇に幅広の連続爪形文が施文されるもの。6は刻みをもつ隆帯脇にペン先状の工具による連続刺突が施されるもの。7は口唇部の隆帯に竹管による刺突があり、その下には幅広の連続爪形文とペン先状工具による連続刺突文が見られる。8は連続爪形文とペン先状工具による連続刺突文が見られる。9は縦位に刺突をもつ隆帯があり、疑似隆帯によるパネル文の一部が見られる。10はペン先状工具により施文されている。11は疑似隆帯によるパネル文の一部。12は竹管による刺突をもつ隆帯により楕円形区間がつくられる。13・14・15・17は疑似隆帯と沈線によって文様が構成されている。16は波状口唇部に耳状の把手が付けられている。18は口唇部に隆帯が付けられ、その下に大きな押圧に沈線が施された文様をもつ。19は口唇が肥厚し、その下に縦位の沈線が施さ



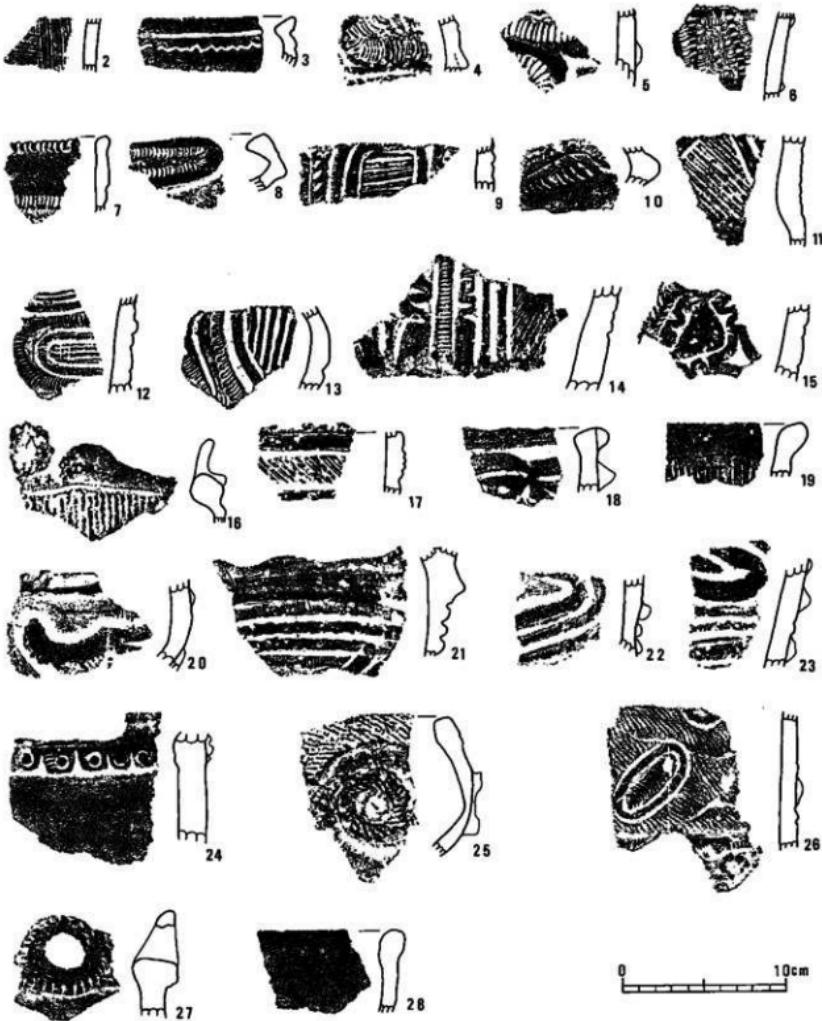
第27図 SB 4 土坑



写真35 SB 4 土坑 遺物出土状態（1）



写真36 SB 4 土坑 遺物出土状態（2）



第28図 SB 4 土坑出土土器 (1)

れる。20はキャリバー形土器の口縁部、脇に刻みをもつ隆帯が付けられている。21は断面が三角形のとくに太い隆帯が横走する。22・23は太い隆帯付けられている。24は口縁部で小突起が剥がれたようである。横走する隆帯に沈線・刻み・竹管による刺突など見られる。25は口縁沿うものと環状の隆帯上に太いR Lの繩文が施されている。25はL R繩文の地文として、竹管による刺突をもつ短い隆帯の周囲を半截竹管による疑似隆帯で囲んでいる。27は環状把手の一部で脇に刻みをもっている。28は口唇が肥厚する無文の口縁部。

SB5土坑

位置：2-K-1 G

形状・規模：楕円形？、長軸1.52m

(現存)、短軸1.77m、深さ1.03~1.52cm

時期：中期後半

直径約2.5mほどの範囲で遺物まとまりがあったため、SB5と命名した。しかし遺物を取り上げながら振り進めた結果、深い大型の楕円形の土坑と判断した。遺構名称はそのままSB5を使用した。

形態は、調査区外に遺構が広がっているため、全貌は明らかでない。断面形は、底が平坦でロート状にやや緩やかに立ち上がっている。底部から検出されたピットらしきものの覆土は、地山の黄褐色土の極大粒(径10mm以上)を多く含み、掘削後に間もなく埋め戻されたものと考えられる。その他の土層はレンズ状を呈し、自然堆積と判断される。用途などの性格は不明である。

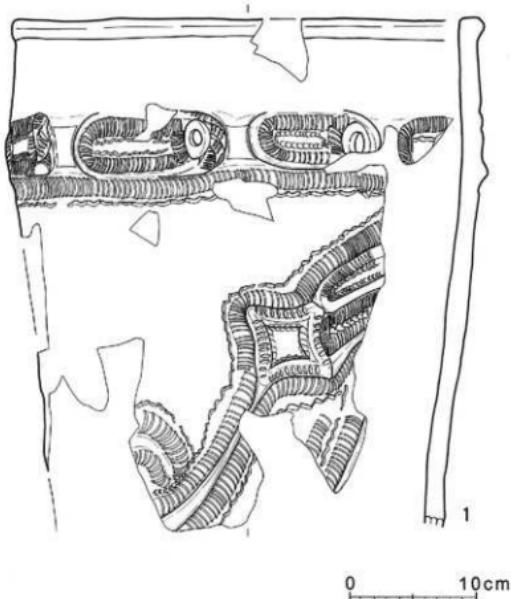
出土遺物：第30図1はペン先状工具による連続刺突が施される。2は隆帯脇に棒状工具にて連続刺突が施されたもの。3は疑似隆帶と沈線によるパネル文が表出される。4は刻みをもつ隆帶が付けられるもの。5は疑似隆帶により区画した内を沈線・ペン先状工具などによる刻みなどによって充填している。6は隆帶脇に幅広の連続爪形文が施される。7は隆帶が付けられている。8は押圧をもつ隆帶が付けられ、その間を沈線で充填されている。9は連続刺突の一部が見られる。10は斜行沈線が施されている。曾利期。11は屈曲した深鉢の口縁部、隆帶が付けられ、以下に縄文L-Rが施されている。12はR-Lの縄文が施された胴部。13・14・15は沈線が施されている。16は沈線の間に縄文が充填されている。17は太い沈線で区画された内を無節Lの縄文で充填している。18は無節Lの縄文が施されている。

SB6住居跡

位置：2-0-8 G

重複：SF2・SF4に切られる

形状・規模：円形、長軸3.10m、短軸1.68m(現存)



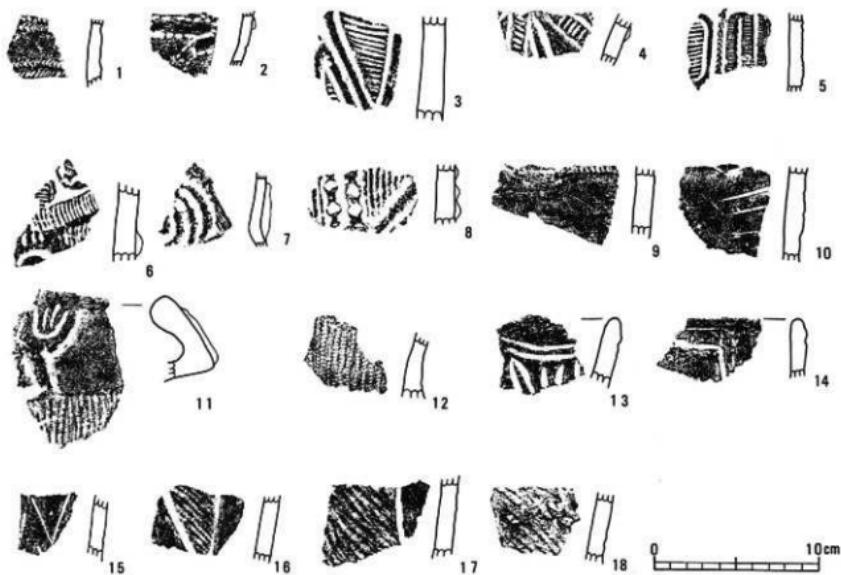
第29図 SB4土坑出土土器(2)



写真37 SB4土坑出土土器



写真38 SB 5 土坑 完掘後の清掃作業



第30図 SB 5 土坑出土土器

床・壁：壁高20cm

炉：地床炉、長軸67cm、短軸52cm、深さ21cm

時期：中期中業（藤内期）

S F 2 道路関連遺構の硬化面を剥がした下から発見された。また住居の東壁の一部をが S F 4 に切られている。第32図の5層と7層がS F 2 の堆積土で強く硬化した面である。S B 6 住居跡の覆土は8層～12層で、暗褐色土ないし褐色土を基調としたものである。床面は地山床で硬化はやや弱かった。約半分のみの調査であるが、柱穴は3基検出されたが、いずれも約20cm程度の浅いものであった。また、焼土塊や炭化物を多量に含んだ地床炉をもつが、その位置が柱穴よりも實際になる変則的なものである。

出土遺物：第34図1は隆帯に平行して刺突が施されている。2は隆帯脇にペン先状工具にて連続刺突が施されている。3は疑似隆帯によって区画され沈線で充填されたパネル文。4は疑似隆帯で一部には爪形刻みが付けられる。5は刻みをもつ隆帯が付けられている。6は波状突起の頂点で、大きな孔が開いているもの一部である。連続刺突が施されている。7は低い爪形の刻みをもつ隆帯と疑似隆帯などによって文様が構成されている。8は口唇部が肥厚しその下に連続爪形文が施文されている。9も口唇部が肥厚しその下に疑似隆帯が付けられている。10は浅い沈線が縦位に施されている。11は爪形文による刻みをもつ隆帯で区画され、さらにこの中のを疑似隆帯で囲む沈線などで充填されている。12は疑似隆帯が横走する底部付近。13は半截竹管による疑似隆帯を連ねたもの。14は屈曲部の一部と考えられる。刻みをもつ隆帯が一部見られる。15は隆帯上に繩文が施文されている。16は太い繩文Rしが施されている。17は繩文地に隆帯が付けられている。18は脚部と考えられ、孔がある。

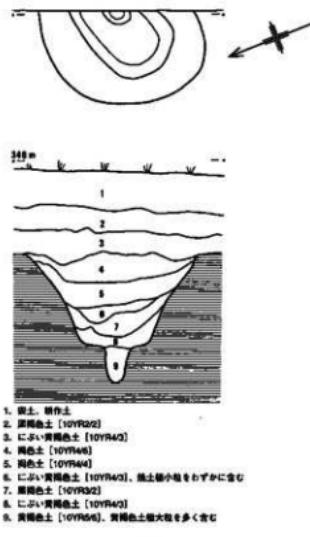
S Z 1 不明遺構

位 置：1-H-13G

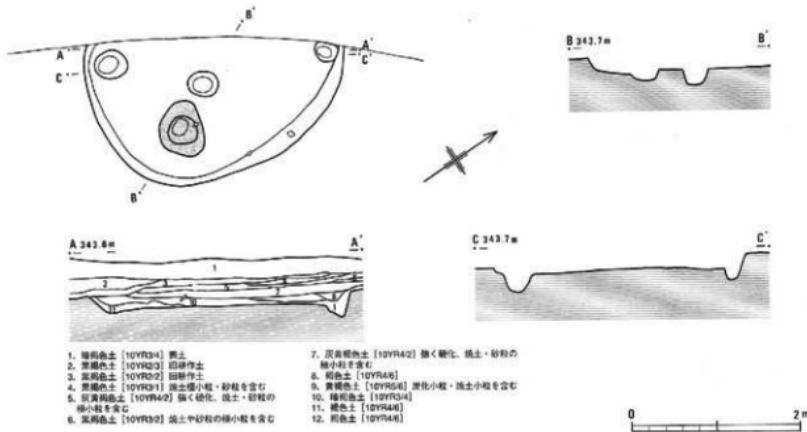
1974年の第4次調査の東側に隣接する部分である。遺物が若干まとまって出土したが、硬化面もなく住居としては考えられず、性格不明の遺構として S Z 1 不明遺構と命名した。遺物を取り上げつつ掘り下げ、ピット5基を検出した。

出土遺物：第36図1は口唇部が強く屈曲する大型の浅鉢、口唇部と屈曲部に沈線を巡らせて、区画した中を沈線で細かく刻んでいる。

第37図2は口縁部に三角の印刻文、その下に集合沈線が施される。五領ヶ台期。3は一部に刻みをもつ隆帯により円形のモチーフを表出されている。4は細い隆帯が貼付されるが器面が風化により荒れている。5は疑似隆帯により区画しその下を沈線によって充填している。6は口唇部が肥厚し、沈線によって三叉文などが表出されている。7・8は肥厚した口唇部をもつ沈線が施されている。9は太い沈線が施されている。10は口縁部に無文帯が巡るキャリバー形土器、刻みをもつ隆帯が縦横に付けられ、沈線により充填されたパネル文をもつ。11は指頭状の圧痕をもつ隆帯が縦横に付けられている。12は指頭圧痕をもつ隆帯が斜行し、沈線により弧状のモチーフが表出されている。13は半截竹管による刺突をもつ隆帯が走り、その間を半截竹管による疑似隆帯で埋めている。14は口縁部の把手の一部、矢羽状の刻みをもつ隆帯が縦位に付いている。



第31図 SB 5 土坑



第32図 SB 6 住居跡

15は細い隆帯が貼付された口縁部。16は隆帯が横走し、以下にL Rの繩文が施されている。17は繩文を地文として一部隆帯が貼付されている。18は幅広の深い沈線の間をR Lの繩文で充填されている。19は口唇部の肥厚した部分、太い沈線が施されている。20は櫛歯状工具による条線が施され、幅広で深い沈線が2本見られる。

土坑

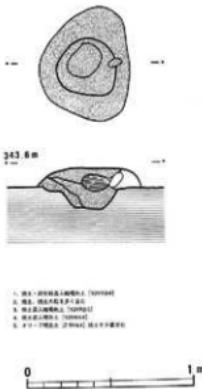
土坑・ピットは、直径15cm程度ものまで含めると約100基を検出した。ここでは規模の大きなもの、遺物が出土したものなど主要なもの第1表の一覧表に報告する。

遺構外出土の土器

第40図1は半截竹管による深い押し引きによる疑似隆帯に直行して細粘土紐を貼りつけたもの。十三世紀後期。2は半截竹管による連続刺突をもつ隆帯が横走し、その上にペン先状工具による連続刺突が施されている。3は細いR Lの繩文が施される。4は環状の把手の一部、半截竹管による疑似隆帯と刻みにより文様が構成されている。5は連続刺突が施されている。6は低い隆帯と櫛歯状工具による条線により施文され、渦巻状のモチーフを構成するものと考えられる。曾利期。7は断面三角形の隆帯が横走し、その上下に細い円形の刺突（直径約2mm）が施されている。中期末。8は波状口縁の頂部で、太く深い沈線が施されている。9は「ハ」字状の列点が施されている。10は磨消繩文で、渦巻き状のモチーフを構成すると思われる。12・13は削り出し手法による平行沈線が施された口縁部。14は半截竹管による平行沈線を引き、その間の疑似隆帯に刺突を施したもの。15は甕の口縁部、刻みをもつ工具による刺突が施されている。弥生時代後期～古墳時代前期。

土偶（第42図、第2表）

1は土偶の足先、指の表現の刻目は測図右側を含めて5箇所観察される。刻目の両端を含めると6本指と



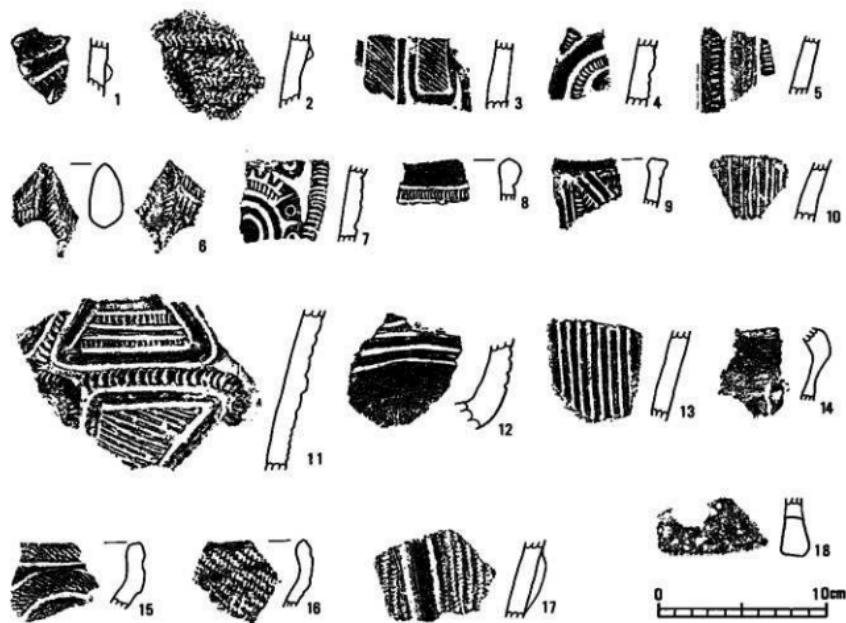
第33図 SB 6 住居跡跡炉跡



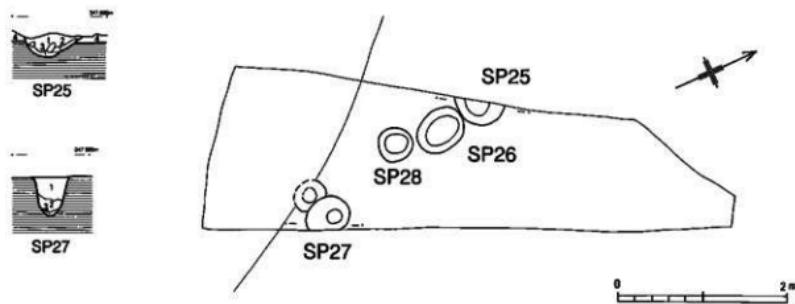
写真39 SB 6 住居跡 遺物出土状態



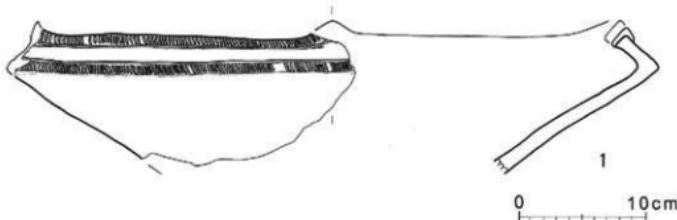
写真40 SB 6 住居跡 完掘



第34図 SB 6 住居跡 出土土器



第35図 SZ 1 不明造構



第36図 SZ 1 不明遺構出土土器 (1)



写真41 SZ 1 不明遺構出土土器

も数えられる。2も土偶の足先と思われるが部分的で明確ではない。3は粘土塊の縫ぎ目で欠損しており、土偶の一部と思われるが部位は不明。

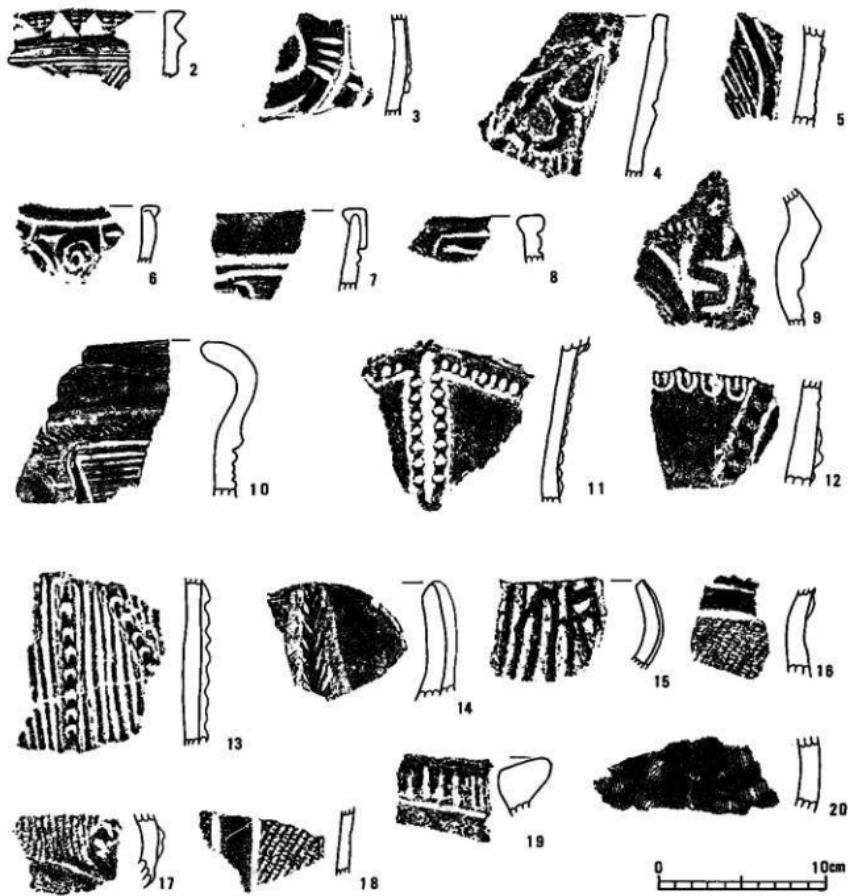
土製円盤（第43図、第3表）

ほぼ完形のものを図化した。最大径3~5cm、重量10~20gものが中心で、やや小振りな印象を受ける。

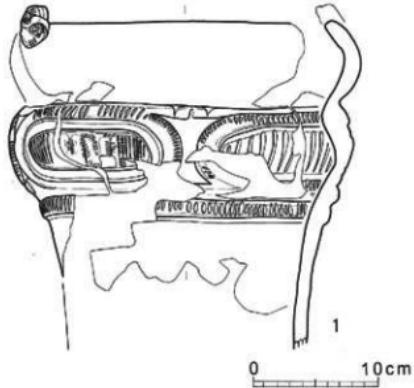
石器

出土した全石器の組成を把握するため、破片を含めた全点を第4表上野原遺跡石器組成一覧を作成した。

第1図1から10は石鎌。1は右脚部をわずかに欠損する。2は横長剥片素材の未製品、背面左側に見られるステップを除去しようとして失敗し放棄したものと推定される。3は左脚部を欠損する。4は右側部を欠損する。5は先端と左脚部を欠損する。6は未製品、左脚部を欠損したため、先端を仕上げずに放棄されたものと考えられる。7は先端を欠損する。8は先端を大きく欠損する。9は未製品、右脚部は欠損したままで未調整である。10は未製品の可能性が高い。先端部はわずかだが未調整の部分がある。左脚部を欠損したため、放棄されたものであろうか。11は錐、調整が粗雑でしかもルーペによる観察でも擦痕も認められず、未製品の可能性が高い。12はスクレイパー。13はサム・スクイバー（拇指形搔器）、素材面の後構成などに旧石器的特徴をもつ。北巨摩郡高根町の舍口遺跡などに類例が求められる。14は槍先形尖頭器、基部を欠損する。15は小型磨製石斧、刃部も基部も欠損するが、表裏面側面とも丁寧に研磨されている。16~27は打製石斧。16だけが刃部の一部を欠損するのみではほぼ完形である。21は転石を素材とし、図の裏面はほぼ全体が自然面であり、他の打製石斧と比べ異質である。28は綱型の石匙である。29~31は磨石。29は小型の磨石、凹の浅い凹と敲打面をもつ。30は磨石に分類したが、柔軟なものを擦り付けたと推定される明瞭な摩滅が片側側縁の表裏面に見られる。31も片側側縁に柔軟なものを擦り付けたと推定される摩滅が見られる。32は凹石、割れた面にも凹がある。33は凹をもつ磨石、上下に敲打面がある。34~37は磨石で凹をもつ。34は下部の敲打痕の中には赤色顔料の付着が見られる。38~40は磨石。41は横形の磨石、下部に敲打面があり、両側縁と上縁に抉りをもつ。抉りを利用して柄などを装着したものと推定される。42は多孔石。



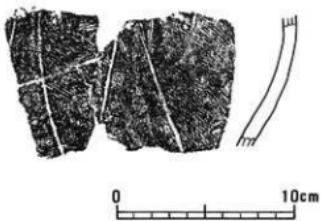
第37図 SZ 1 不明遺構出土土器 (2)



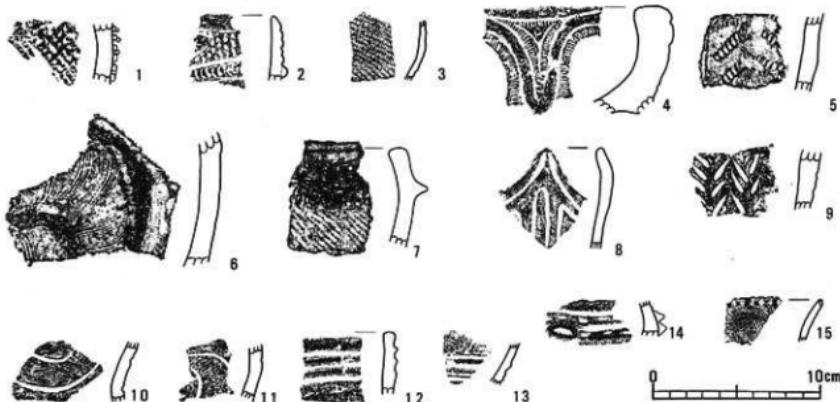
第38図 SP57土坑出土土器



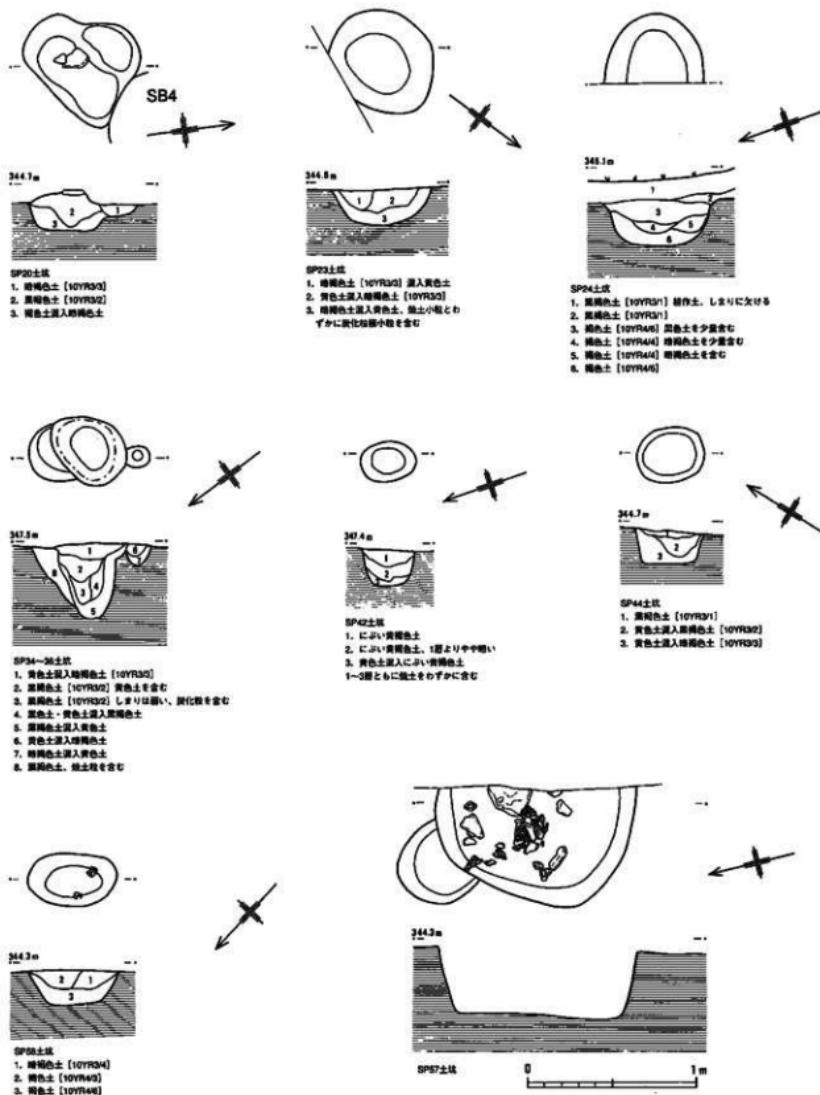
写真42 SP57土坑出土土器



第39図 SP58土坑出土土器



第40図 遺構外出土の土器（縄文時代～古墳時代）



第41図 SP20・SP23・SP24・SP34~36・SP42・SP44・SP57・SP58土坑



写真43 SB1 住居跡・SB4 土坑付近



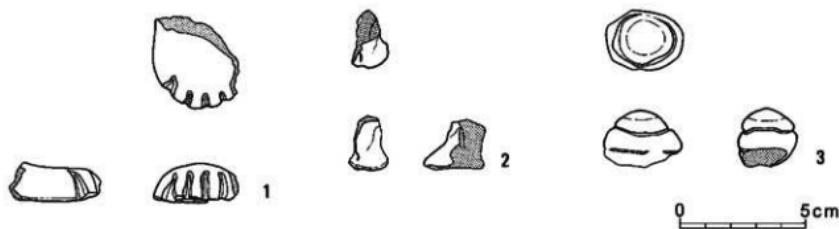
写真44 SP39土坑 ミニチュア土器出土状態



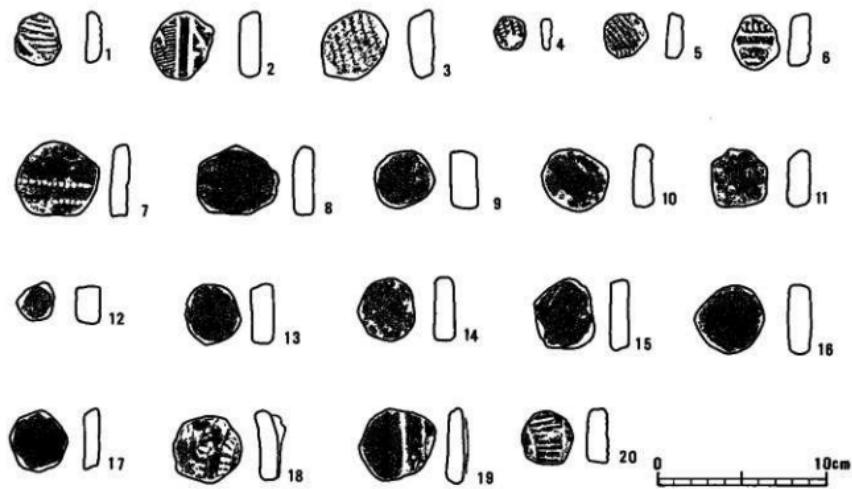
写真45 SP57土坑 遺物出土状態

第1表 土坑一覧

遺構番号	位置	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時間	重複	特記出土遺物
SP1	2-N-6G	楕円形	逆台形	53	33	19		SF3を切る	
SP2	2-N-6G	不整円形	逆台形	63	42	19		SF3を切る	陶器片あり
SP3	2-N-6G	楕円形	U字形	49	27	14		?	
SP4	2-L-2G	不整円形	逆台形	35	25	37		—	
SP5	2-M-5G	楕円形	逆台形	121	86	50	縄文中期後半	SP52を切る	
SP6	2-M-5G	楕円形	逆台形	35	28	20	不明	—	
SP7	2-M-5G	円形	逆台形	25	24	24	不明	—	
SP8	2-M-5G	円形	逆台形	32	19	18	不明	—	
SP9	2-M-5G	円形	逆台形	33	28	26	不明	—	
SP10	2-M-5G	円形	圓状	32	29	18	不明	—	
SP11	欠番								
SP12	2-M-5G	円形	圓状	36	32	17	不明	—	
SP13	2-M-5G	円形	U字形	36	27	46	不明	—	
SP14	2-M-5G	楕円形	U字形	40	30	24	不明	—	
SP15	欠番								
SP16	2-L-3G	円形	?	35	31	12	縄文中期中葉(新道期)	—	
SP17	欠番								
SP18	欠番								
SP19	2-L-3G	不整円形	逆台形	-68	46	16	縄文中期中葉(新道期)	SP20に切られる	縄文土器片
SP20	2-L-3G	不整円形	逆台形	-138	72	39	縄文中期後半	SP19を切り、SB4に切られる	縄文土器片
SP21	欠番								
SP22	欠番								
SP23	2-L-3G	不整円形	U字形	132	112	46	縄文中期中葉	—	
SP24	2-M-3G	楕円形?	逆台形?	-85	117	51	縄文中期後半	—	
SP25	1-G-12G	円形?	U字形	59	30	25	不明	—	
SP26	1-G-12G	楕円形	逆台形	61	47	22	不明	—	
SP27	1-G-12G	不整円形	U字形	53	43	50	縄文中期	—	
SP28	1-G-12G	円形	U字形	41	40	27	縄文中期中葉?	—	
SP29	1-H14-G	円形?	U字形?	-87	72	73			
SP30	2-K-1G	不整円形	逆台形	70	41	28	不明	SF31に切られる	
SP31a	2-K-1G	不整円形	逆台形	110	70	27	不明	SP31bに切られる	
SP31b	2-K-1G	不整円形	逆台形	94	72	32	不明	SP31aに切れる	
SP32	2-K-1G	不整円形	逆台形	62	39	26	縄文中期中葉	SB4を切る	
SP33	1-K-20G	円形?	U字形	27	26	27	縄文中期後半	SP35に切られる	
SP34	1-H-15G	円形?	U字形	-33	65	57	不明	SP34を切る	
SP35	1-H-15G	不整円形	U字形	97	72	78	縄文中期後半	SP35を切る	
SP36	1-H-15G	楕円形	U字形	-29	25	20	縄文中期	SP38に切られる	
SP37	1-I-15G	円形?	U字形	-42	26	18	不明	SP37を切る	
SP38	1-I-15G	楕円形	U字形	44	36	23	不明	SP40・SP43に切られる	
SP39	1-I-15G	楕円形	逆台形	-33	46	20		SP39・43	
SP40	1-I-15G	楕円形	U字形	53	32	44	不明	—	
SP41	1-I-15G	円形?	U字形	35	18	22	不明	—	
SP42	1-I-15G	楕円形	U字形	66	47	44	縄文中期中葉	SP43bに切られる	
SP43a	1-I-15G	楕円形	U字形	-27	25	23	不明	SP43aを切る	
SP43b	1-I-15G	楕円形	U字形	22	17	15	不明	—	
SP44	2-L-2G	楕円形	逆台形	81	65	44	不明	—	
SP45	2-L-2G	楕円形	U字形	38	25	30	不明	—	
SP46	2-K-1G	楕円形	逆台形	-75	55	22	不明	—	
SP47	1-I-15G	円形?	逆台形?	125	35	24	縄文中期	—	
SP48	1-H-16G	円形?	U字形?	41	17	53	不明	—	
SP49	1-I-16G	円形?	U字形?	43	43	32	不明	—	
SP50	1-I-15G	円形	逆台形	42	38	24	不明	—	
SP51	1-I-15G	円形	逆台形	-56	28	12	縄文中期	—	
SP52	2-L-2G	円形?	U字形?	-22	38	28	不明	SP5に切られる	
SP53	2-L-2G	円形	U字形	41	36	14	不明	—	
SP54	2-L-2G	楕円形	U字形	90	63	37			
SP55	1-H-15G	円形?	U字形?	-38	-15	593	不明	—	
SP56	2-L-3G	円形	逆台形	-94	40	63	縄文中期中葉	—	
SP57	2-M-6G	円形?	逆台形	-123	64	41	縄文中期中葉(井戸尻)	SP62を切る	
SP58	2-M-6G	楕円形	逆台形	107	63	39	縄文中期末	—	
SP59	2-M-6G	円形	U字形	65	57	27	縄文中期後半	—	
SP60	1-I-15G							SP47と重複	
SP61	2-L-4G	円形	U字形	25	25	19	不明	—	
SP62	2-M-6G	楕円形	U字形	-58	51	31	不明	SP62を切る	
SP63	2-M-4G	円形	逆台形	118	98	37			
SP64	1-I-19G	不整円形	U字形	-47	17	40			



第42図 土偶



第43図 土製円盤

第2表 土偶一覧

実測図	出土位置1	出土位置2	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	備考
第42図1	2-K-1G	/	[3.6cm]	[3.5cm]	[1.4cm]	17.4 g	土偶の足先
第42図2	SB3住居跡	P-38	[2.4cm]	[1.5cm]	[2.2cm]	4.6 g	土偶の一部?
第42図3	SB2住居跡	ピット2	[2.3cm]	[3.1cm]	[2.2cm]	12.3 g	土偶?

第3表 土製円盤

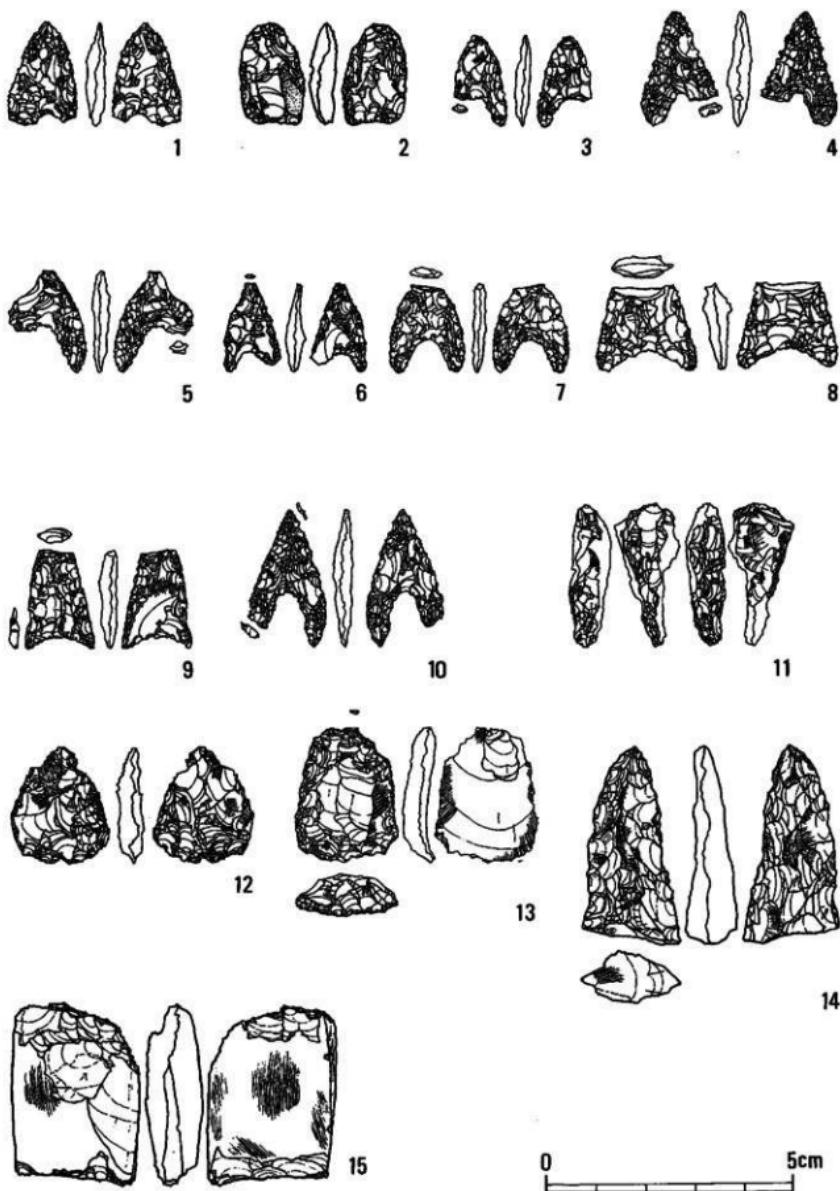
実測図	出土位置1	出土位置2	最大径(cm)	最少径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第43図1	SB1住居跡	/	3.1cm	2.5cm	0.8cm	7.8 g	
第43図2	SB1住居跡	/	4.1cm	3.2cm	1.2cm	18.9 g	
第43図3	SB1住居跡	P-5	4.7cm	3.6cm	1.4cm	25.6 g	
第43図4	SB2住居跡	/	2.1cm	1.8cm	0.6cm	2.5 g	
第43図5	SB2住居跡 ^a	P-321	2.7cm	2.6cm	1.0cm	8.7 g	側面研磨
第43図6	SB2住居跡	P-388	3.1cm	2.1cm	1.3cm	11.7 g	
第43図7	SB3住居跡	P-363	5.0cm	4.3cm	1.0cm	27.2 g	側面研磨
第43図8	SB3住居跡	P-121	4.9cm	4.1cm	1.2cm	28.9 g	側面一部研磨
第43図9	SB3住居跡	/	3.7cm	3.3cm	1.6cm	25.7 g	側面一部研磨
第43図10	SB4上坑	P-173	3.9cm	3.6cm	1.3cm	19.0 g	側面研磨
第43図11	SB5下坑	P-32	3.6cm	2.9cm	1.3cm	17.5 g	
第43図12	SB6E住居跡	P-46	2.4cm	2.1cm	1.4cm	8.6 g	側面研磨
第43図13	SP12上坑	/	3.6cm	2.9cm	1.2cm	17.9 g	側面全周研磨
第43図14	1-H-15 G	P-105	3.8cm	3.4cm	1.3cm	18.5 g	側面研磨
第43図15	1-K-20 G	/	4.3cm	3.3cm	1.1cm	21.1 g	
第43図16	1-K-20 G	P-	4.1cm	3.8cm	1.3cm	27.8 g	側面全周研磨
第43図17	2-K-1 G	/	6.7cm	3.2cm	0.8cm	13.0 g	側面一部研磨
第43図18	2-L-2 G	P-	4.4cm	4.0cm	1.1cm	25.4 g	側面研磨
第43図19	2-L-3 G	P-	4.6cm	4.1cm	1.0cm	22.7 g	側面研磨
第43図20	SF2	/	3.1cm	2.9cm	1.4cm	15.2 g	側面一部研磨



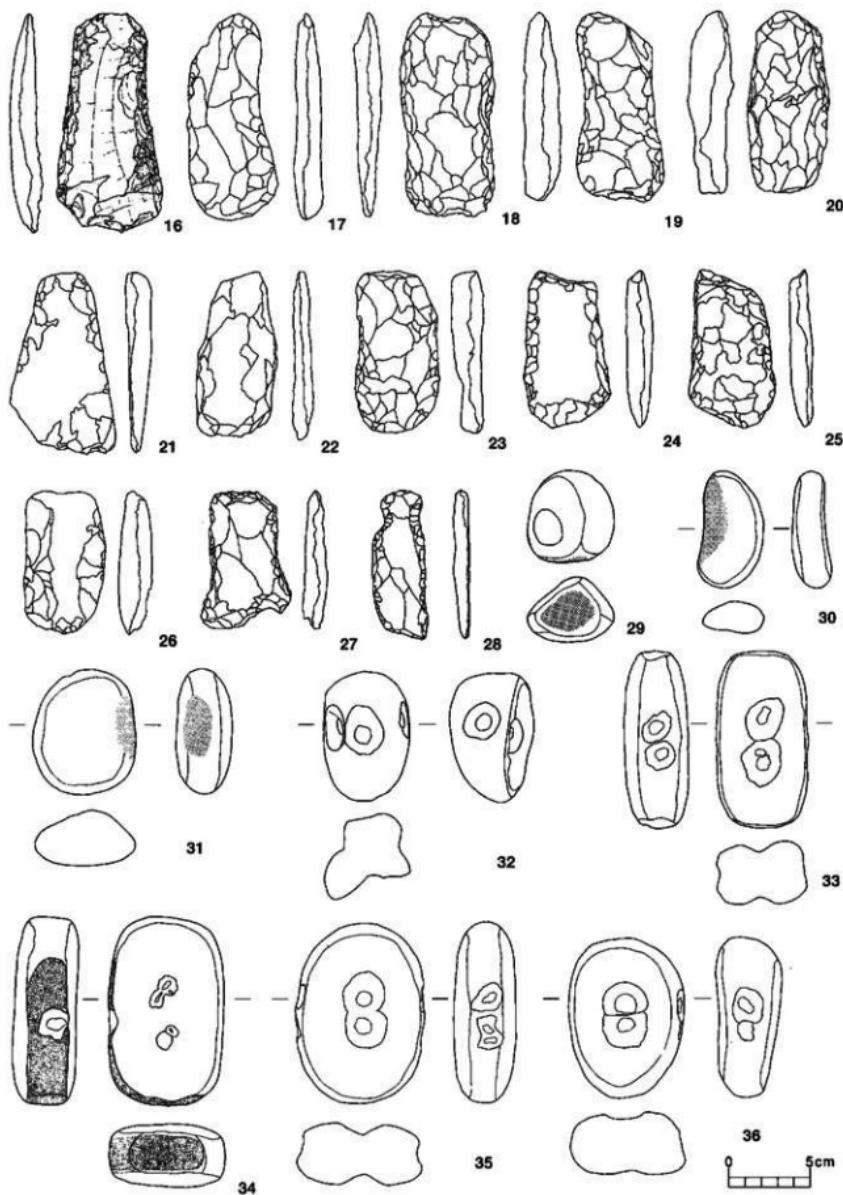
写真46 土偶・ミニチュア土器（実物大）

第4表 石器観察表

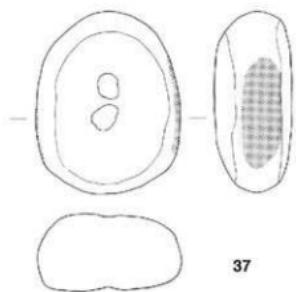
実測箇	出土位置1	出土位置2	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第44㉙1	2-M-5G	S-5	石鎚	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.89	右脚先端をわずかに欠損
第44㉙2	SB3#	—	石鎚	黒曜石	2.1	1.4	0.5	1.27	横長削片素材の未製品
第44㉙3	1-H-15G	S-12	石鎚	黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.40	左側欠損
第44㉙4	2-M-6G	—	石鎚	黒曜石	2.3	[1.6]	0.5	0.90	
第44㉙5	2-K-1G	—	石鎚	黒曜石	2.1	[1.6]	0.4	0.64	
第44㉙6	1-H-15G	—	石鎚	チベット(赤褐色)	1.8	1.2	0.4	0.41	
第44㉙7	—	—	石鎚	チベット(緑色)	[1.8]	1.7	0.2	0.75	
第44㉙8	SB1	2-L-3G	石鎚	黒曜石	[1.8]	2.1	0.6	1.70	
第44㉙9	2-O-9G	S-9	石鎚	黒曜石	[2.0]	1.4	0.3	1.01	
第44㉙10	SB4	S-7	石鎚	黒曜石	2.8	1.6	0.4	0.97	
第44㉙11	SB2	S-5	鎌	黒曜石	[2.0]	1.3	0.8	2.37	
第44㉙12	2-L-1G	S-2	スクレバー	黒曜石	2.4	2.1	0.5	2.32	
第44㉙13	2-L-1G	S-12	スクレバー	黒曜石	2.7	2.1	0.5	3.40	
第44㉙14	SB3	S-1	槍先	泥岩	4.0	2.0	1.0	6.29	
第44㉙15	SP31	—	研磨石斧	蛇紋岩類	[3.8]	2.6	1.2	17.47	
第45㉙16	2-N-10G	S-2	打製石斧	粘板岩	13.4	6.5	1.8	189	
第45㉙17	SP31	—	打製石斧	粘板岩	12.7	5.4	1.7	134	
第45㉙18	SF2	—	打製石斧	粘板岩	12.6	5.9	1.8	145	
第45㉙19	1-L-16G	S-2	打製石斧	粘板岩	11.7	5.4	2.2	178	
第45㉙20	SF2	P-1	打製石斧	粘板岩	11.1	5.0	3.0	184	
第45㉙21	2-N-8G	S-9	打製石斧	粘板岩	11.2	6.6	1.6	125	
第45㉙22	SB3	S-6	打製石斧	粘板岩	10.1	4.9	1.1	63	
第45㉙23	SZ-1	S-8	打製石斧	粘板岩	9.9	5.3	2.0	127	
第45㉙24	SB3	P-6	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	5.4	1.6	106	
第45㉙25	2-L-2G	—	打製石斧	粘板岩	9.8	5.2	1.3	90	
第45㉙26	2-K-1G	—	打製石斧	ホルンフェルス	9.8	5.0	2.0	118	
第45㉙27	SF2	—	打製石斧	粘板岩	8.3	5.7	1.4	72	
第45㉙28	SB2	S-8	石底	粘板岩	9.1	3.3	0.9	33	
第45㉙29	SB3	S-3	磨石	安山岩	5.6	5.4	3.9	135	
第45㉙30	表採	—	磨石	安山岩	7.3	3.8	2.4	67	
第45㉙31	表採	—	磨石	安山岩	7.8	6.5	3.5	218	
第45㉙32	SF2	—	磨石(凹石)	安山岩	8.1	5.5	4.4	220	
第45㉙33	SB6炉	焼土内S-1	磨石(凹石)	安山岩	11.0	5.7	3.9	339	
第45㉙34	1-H-15G	S-1	磨石(凹石)	安山岩	11.7	5.9	3.9	487	
第45㉙35	SB4	S-8	磨石(凹石)	安山岩	11.4	8.0	3.7	493	
第45㉙36	SB3	S-1	磨石(凹石)	安山岩	10.0	7.2	4.1	385	
第46㉙37	SZ4	S-1	磨石(凹石)	安山岩	11.2	8.9	4.8	661	
第46㉙38	表採	—	磨石	安山岩	12.3	9.0	5.5	722	
第46㉙39	表採	—	磨石	安山岩	13.1	10.8	7.6	1383	
第46㉙40	表採	—	磨石	安山岩	9.1	8.8	5.5	554	
第46㉙41	SB6	S-1	?	砂岩	8.5	14.9	3.3	608	
第46㉙42	SZ1	S-12	多孔石	礫岩?	15.4	13.7	6.0	1684	



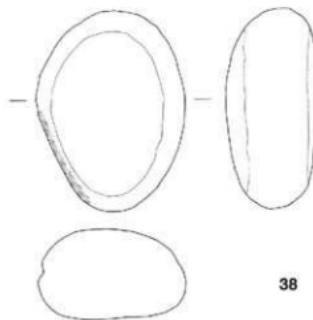
第44図 石器 (1)



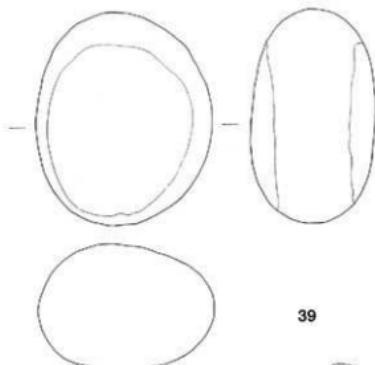
第45図 石器 (2)



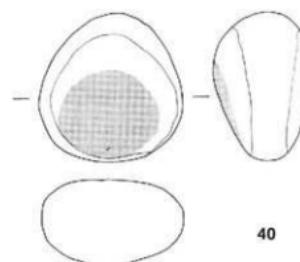
37



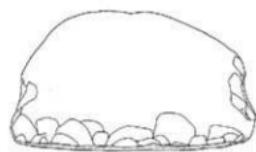
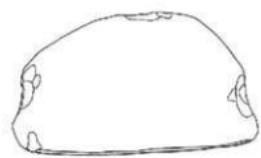
38



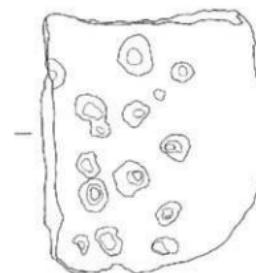
39



40



41



42

敲打面

磨り面

赤色顔料付着面

第46図 石器 (3)

第5表 遺構別石器組成

遺構	石鏃	磨製石斧	削器	側器	ポイント	打製石斧	磨石	石盤	石頭・ハチの集石	ハチの集石	凹石	凸石?	石柱(石棒)	未製品	名称不明	小計	
小計	14	1	2	1		28	22	12		2	1	3	2	1	1	2	92
SB1	1					1	2	3		2							9
SB2	1					3	2	1			1				1		9
SB3	1				1	4	2				1						9
SB4	1					6	1										8
SB6							1	1									2
SF2						4	2				1	2					9
SP20							2										2
SP60																	1
SP31		1											1				1
SZ1						4	1	1		1							7
SZ3						2											2
SZ4							1										1
—括	10		2			2	7	1						1			23
表採						2	5	1							1		9

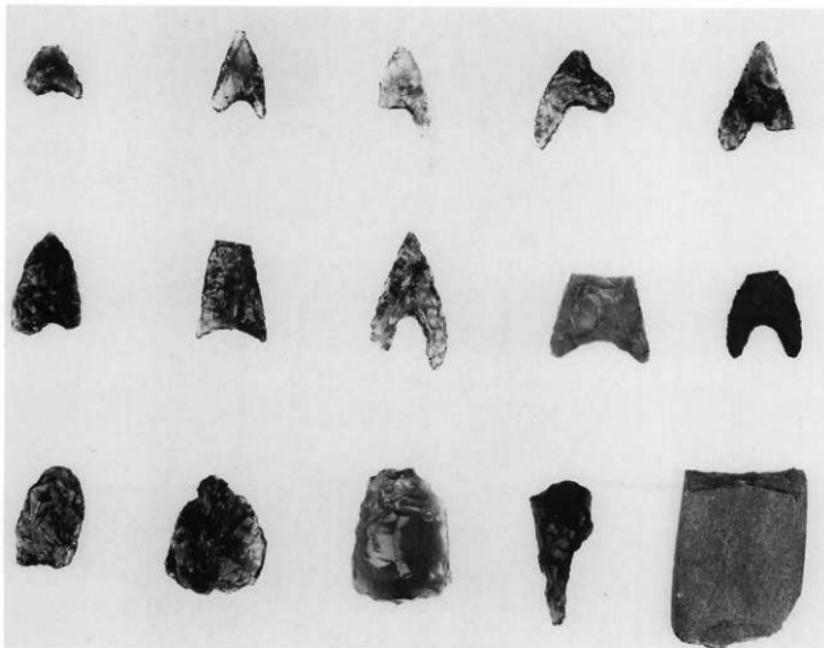
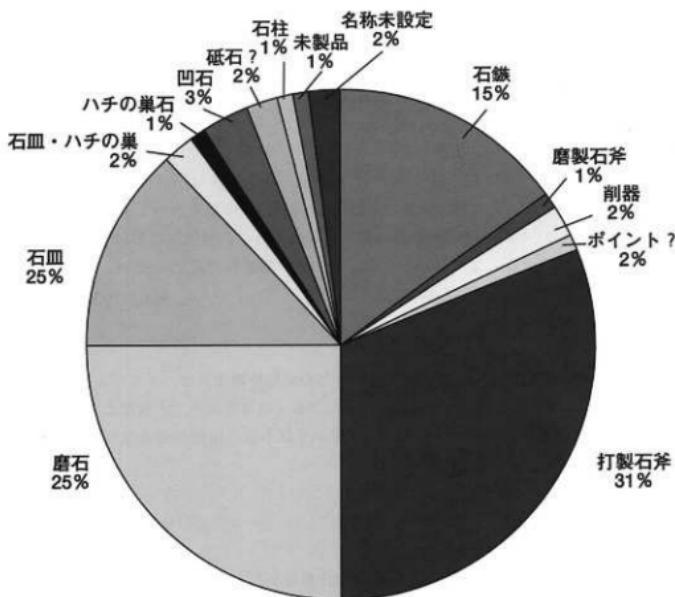
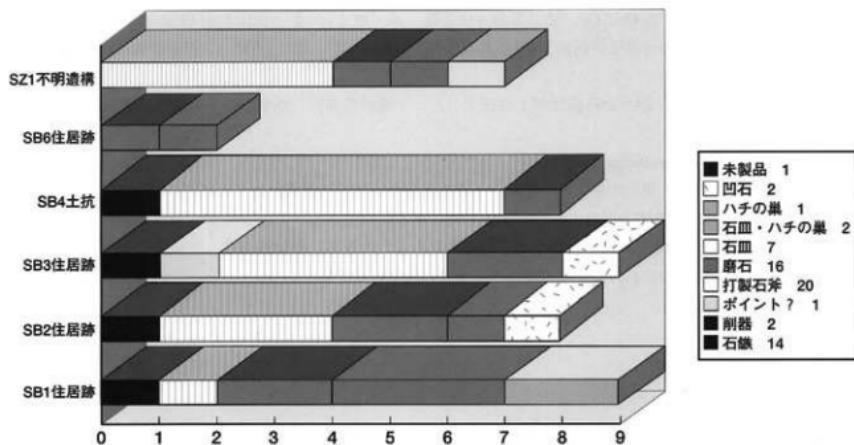


写真47 石 器（实物大）



第47図 石器組成



第48図 遺構別石器組成

第4章 自然科学分析

第1節 上野原遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

上野原遺跡は山梨県東八代郡中道町右左口字上野原に所在する。本遺跡は、御坂山系に連なる日陰山、滝戸山から甲府盆地に至る曾根丘陵の最上部に位置しており、縄文時代中期を中心とする住居跡や土坑が検出されている。今回、縄文時代中期の住居跡の炉の焼土から出土した大型植物化石について検討を行った。試料は、乾燥後、フローテーションにより採取された。なお、一部試料の同定にあたっては流通科学大学の南木睦彦助教授にご指導して頂いた。ここに感謝いたします。

2. 出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を第6・7表に示す。出土した大型植物化石は、オニグルミ（炭化核）、ササゲ属（炭化種子）、エノキグサ（炭化種子）であった。オニグルミは落葉高木で、食用となる。ササゲ属（アズキ、リヨクトウの類）は栽培植物で食用となる。エノキグサは平地の路傍や畑地などにみられる雑草である。

3. 大型植物化石の記載

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 炭化核

出土した炭化核は全て破片であったが、完形であれば側面觀は卵形から円形、先端は鋭頭、上面觀は円形。表面は、縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。なお、以下に示す試料に含まれていた不明炭化物は、非常に細かな破片であるため同定には至らないが、オニグルミ（炭化核）の可能性がある。試料1（SF2道路間連遺構 2-O-9G）、3（SF4道路間連遺構 南北へり黒色土）、6（SB6住居跡 炉・焼土）、11（SB6住居跡 烧土）、15（ケースの外）、16（SF2道路間連遺構 2-O-9G）、17（黒色土）、18（SF2道路間連遺構 2-O-7G）、2（SB6住居跡 炉・焼土）、4（SB3住居跡 炉・焼土）、6（SB3住居跡 炉）、7（SB3住居跡 炉）、8（SB3住居跡 炉・焼土）、17（SB2住居跡 烧土）。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

試料6（SB3住居跡 炉）から破片が1点出土した。子葉の内面に、本葉につく長くて明瞭な柄の痕跡がみられる。

エノキグサ *Acalypha australis* Linn. 炭化種子

試料12（SB6住居跡 烧土の炉）から完形が1点出土した。種子は倒卵形、表面はざらつく。虫えい試料17（SF4道路間連遺構 黒色土）から出土した。虫えい（虫こぶ）とは、植物体（葉など）に昆虫が産卵寄生し、その結果生ずる異常発育した部分のことである。大きさ、形は様々で、切断すると種実の構造はもっていない。断面の中央には小さな穴があり、そこに昆虫が寄生する。

第6表 出土した大型植物化石（乾燥試料）

試料番号	分類群1	分類群2	
1	SF2	2-O-9G	不明炭化物、炭化材
2	SF2	2-O-9G	オニグルミ・炭化核破片多数(1~2個分)
3	SF4	南北ベルト黒色土	不明炭化物
4	SB6	SS炉	炭化材
5	SB6	焼土	オニグルミ・炭化核破片多数(2~3個分)
6	SB6	焼土・炉	不明炭化物、炭化材
7	SB6	SS炉	オニグルミ・炭化核破片2(1個未満)・不明炭化物
8	SB6	炭化物	オニグルミ・炭化核破片4(1個未満)・不明炭化物
9	SB6	炭化物	不明炭化物、炭化材
10	SB6	焼土	オニグルミ・炭化核破片2(約1個分)・炭化材
11	SB6	焼土	不明炭化物、炭化材
12	SB6	焼土・炉	オニグルミ・炭化核破片2(約1~2個分)
13	SF4	黒色土	不明炭化物、炭化材
14	SF4	南北ベルト黒色土	不明炭化物、炭化材
15	ケースの外		不明炭化物、炭化材
16	SF2	2-O-9G	不明炭化物
17	SF4	黒色土	不明炭化物、炭化材
18	SF2	2-O-7G	不明炭化物
番号なし	SF2		不明炭化物
番号なし	SF4	黒色土	虫えい

第7表 出土した大型植物化石（水浸け試料）

試料番号	分類群1	分類群2	
1	SB2	焼土	炭化材
2	SB6	焼土・炉	オニグルミ・炭化核破片多数(1個未満)・不明炭化物、炭化材
3	SB6	焼土・炉	オニグルミ・炭化核破片多数(約3個分)
4	SB3	SRSS	不明炭化物、炭化材
5	SB3	SR	石、土
6	SB3	炉	オニグルミ・炭化核破片4(1個未満)・ササ属・炭化木質はへん・不明炭化物、炭化材
7	SB3	SR	オニグルミ・炭化核破片3(1個未満)・不明炭化物、炭化材
8	SB3	炉・焼土	不明炭化物、炭化材
9	SB3	SR	オニグルミ・炭化核破片4(約1個未満)・不明炭化物、炭化材
10	SB3	SR	炭化材
11	SB6	炭化物	オニグルミ・炭化核破片2(1個未満)・炭化材
12	SB6	焼土・炉	エノキ属・炭化種子・1
13	SB3	炉	不明(未炭化・草本の茎?)
14	SB2	焼土	昆虫・破片2
15	SB6	炭化物	不明炭化物
16	SB6	炭化物	不明炭化物
17	SB2	焼土	不明炭化物

第2節 上野原遺跡の炭化材の樹種

植田弥生 (パレオ・ラボ)

当遺跡は山梨県東八代郡中道町右左口字上野原に所在し、曾根丘陵の端に位置する。縄文時代中期の住居跡や多数の土坑が検出されており、ここでは縄文時代中期の住居跡の炉の焼土を洗いフローテーション法により採取した炭化材片の樹種を調べた。いずれも微小な破片であり種を特定できたのはクリ1種のみであった。全般的な傾向はクリまたはシノキ属の破片が多かった。種は特定できなかつたが異なる樹種の試料の写真を撮り、確認できた範囲の組織記載を報告致します。

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割る。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察・写真撮影をした。

以下の試料にやや大きな破片があり、調べた結果は以下の通りです。

(乾燥したビン)

1 SB-2 住居跡 焼土	クリ
	クリまたはシイノキ属
3 SB-6 住居跡 焼土・炉	クリまたはシイノキ属
	広葉樹
4 SB-3 住居跡 焼土・炉	環孔材
7 SB-3 住居跡 炉	クリ
9 SB-3 住居跡 炉	クリまたはシイノキ属
11 SB-6 住居跡 炭化物	クリまたはシイノキ属
17 SB-2 住居跡 焼土	クリまたはシイノキ属

(水が入ったビン)

11 SB-6 住居跡 焼土	クリ
----------------	----

材組織の記載

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真49

年輪の始めに小型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晚材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は單列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。中心部に近い部位であり孔圈部の管孔は小型であった。

暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。縄文時代から果実は食用に、材は柱材の使用例が有名である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. または シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版2 (1 SB-2 住居跡 焼土) 3. (3 SB-6 住居跡 焼土・炉) 4a-4c. (9 SB-3 住居跡 炉)

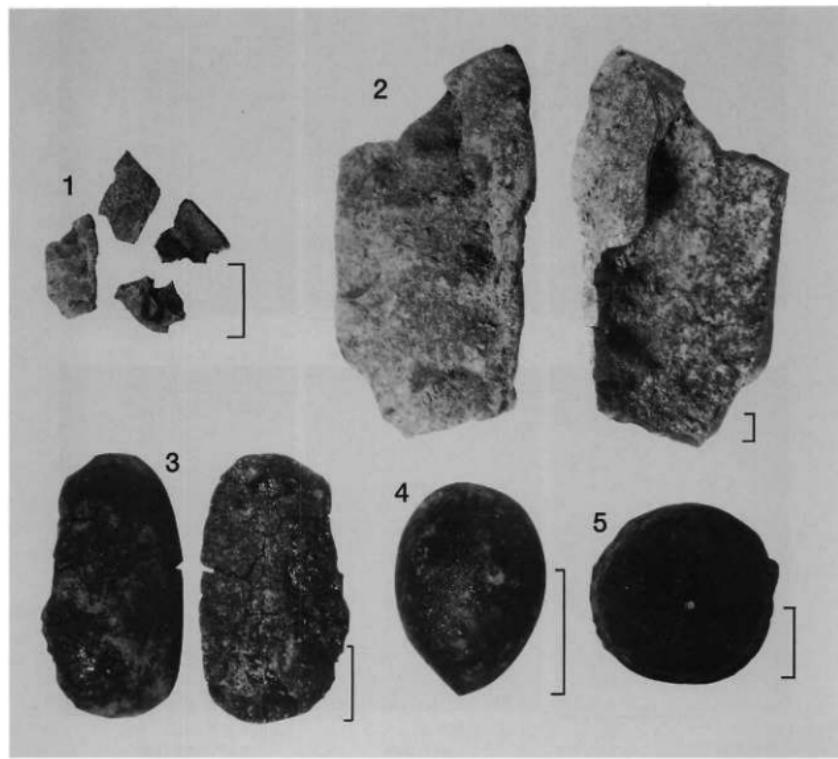
非常に小型の管孔が火炎状に配列する晩材部のみの試料か、中型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する試料で、放射組織はほぼ単列である。年輪初めの管孔の配列状態が壊れているか、試料が小さいため充分確認できない試料である。いずれの試料にも広放射組織は観察されなかった。このような材組織からクリまたはシイノキ属のいずれかと思われる。

環孔材 図版5 (4 SB-3 住居跡 炉)

年輪の始めに中型の管孔が2~3層配列し、晩材部は小型の管孔が2~複数複合して接線状・斜状に配列している。小破片のため接線断面と放射断面は作成できなかった。横断面の管孔配列はヤマグワに似る。

広葉樹 図版3 (SB-6 住居跡 焼土・炉)

小型の管孔が単独または放射方向に2~3個が複合している。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、放射組織は1~2細胞幅である。横断面は一年輪分がなく一部分の管孔配列しか見えておらず分類群を絞ることができない。



1: オニグルミ、炭化核破片、試料11 (SB-6 炭化物)

2: オニグルミ、炭化核破片 (拡大)、試料11 (SB-6 炭化物)

3: ササゲ属、炭化種子破片、試料6 (SB-3 炉)

4: エノキグサ、炭化種子破片、試料12 (SB-6 焼土、炉)

5: 虫えい、試料17 (SF-4 黒色土)

写真48 出土した大型植物化石 (スケール: 1は1cm, 2~5は1mm)

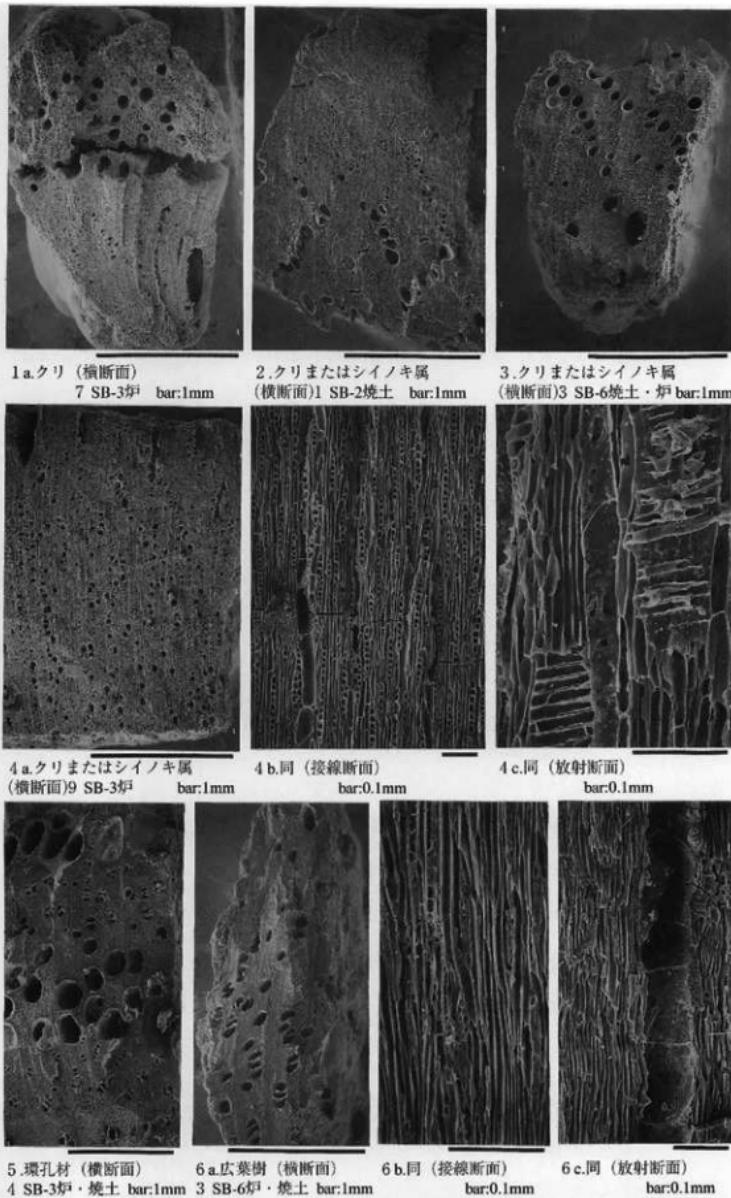


写真49 フローテーションにより出土した炭化材片樹種の電子顕微鏡写真

第5章 遺構と遺物の検討

第1節 古道中道

今回の発掘調査は、国道358号線の拡幅工事に伴って行われた。この国道の前身は「中道」もしくは「中道往還」であり、「中道」町として町名にも取り上げられている。この古道は駿河から甲斐に至る最短コースであり、山梨県において最初に古墳が集中的に築造されるのが中道町であることも「古道中道」の存在と関連しているものと考えられ、歴史的にも非常に古くさかのぼる可能性が高い。そこで以下では、時代幅を広くもった呼称として「古道中道」と称して行きたい。

上野原遺跡で確認された道路関連遺構

S F 1 道路関連遺構 (S F 4 と同一遺構である可能性が高い)

S F 2 道路関連遺構 (ほぼ平坦な硬化面)

S F 3 道路関連遺構 (ほぼ平坦な硬化面 耕作により痛んでいる)

S F 4 道路関連遺構 (S F 1 と同一遺構である可能性が高い)

S F 5 道路関連遺構 (ほぼ平坦な硬化面)

山村信榮（1994）によれば、路面の「硬化」には二つの形状が見られる。すなわち、側溝間の路面全体が硬化するものと、幅約30cmの帯状に検出されるものである。経験的には後者は歩行による通行の痕跡と見られ、前者は人為的路面整地によるものであろうとしている。この山村の分類に従えば、S F 1 と S F 4 は、後者に該当するものと考えられる。S F 2 と S F 5 は側溝をもたないが、広く面上に硬化している点から前者に類似するものと理解したい。側溝については、S F 2 の東側には存在しないことが明らかであるが、西側はS F 5 に切られて不明である。S F 5 については、東側はS F 2 を切って構築され、S F 2 と S F 5 では40~60cmの段差をもつが、そこには明確な溝は確認できなかった。またS F 5 の西側は現国道により掘削され明らかでない。また山村（1994）は、太宰府管内での道路の建設方法を次の道路施工タイプに分類している。

Aタイプ：基本的に安定した地盤の平地であれば平行する2本の溝を掘り、路面になる部分に砂を敷く場合がある。

Bタイプ：緩やかな丘陵部分はカット工法が採用され、路面は緩やかなスロープとなる。

Cタイプ：急斜面を持つ丘陵に対しては『切り通し』となる。

D1タイプ：地盤が湿地などで脆弱箇所には盛り土整地が施される。

D2タイプ：完全な湿地には堤状の土橋が版築工法を用いてつくられる。

地域も大きく離れて地盤をなす土壤も大きく異なるが、上野原遺跡のS F 2 と S F 5 は、山村のBタイプもしくはCタイプに類似するものであり、溝を持たない可能性が高いと考えられる。

道路関連遺構の時期

道路関連遺構の重複関係から、最初に溝状のS F 4 が存在し、この上にS F 2 が構築され、S F 2 を切ってS F 5 が構築されたことを確認した。

遺物の検討からは、S F 1 ~ S F 5 の表土からは、近世～近代に属する染め付けなどの磁器片などの遺物が比較的多く出土したが、この下の硬化面付近ではこれら磁器片は認められなかった。このことから道路関連遺構は、近世後半以前に該当するものと考えられる。溝状のS F 1 と S F 4 は、平面的な位置関係と形態から同一遺構である可能性が高い。しかし道路関連遺構に伴う遺物は極めて少なく、破片ばかりである。S F 4 からの出土遺物は極めて細片であり、同一遺構の可能性の高いS F 1 からは中世陶器細片が出土している。またこの上に構築されたS F 2 からは、12世紀代に属する常滑の三筋壺の肩部破片が、硬化面に明確にめり込んだ状態で出土している。S F 5 は出土遺物なし。

これからを総合すると、溝状のS F 1 ~ S F 4 が形成され、この上にS F 2 が構築され、さらにこの西側を

切って S F 5 が構築された。時期はいずれも中世～近世後半に当たるものと考えられる。

現国道358号線の前身の古道「中道」の由来

次のような記述から近世末には、甲斐と駿河を結ぶ3本の道の中で、中間にあるために「中道」と称されたと考えられていたことが知れる。

『甲斐叢記』(大森快庵1848)

右左口路、又越口とも作けり、山梨・八代二郡に亘れり、駿河への通路三條あり、是路は若彦路と河内路の間にある故、中道とも云り、(以下略)

『甲斐国志』

此レヲ中道ト云フハ本州ヨリ駿州ニ通路三所アリ、一ハ河内路、一ハ若彦路、ニ道の中間ニアルヲ以テ名ヲ得タリ、(以下略)

これらから、甲斐と駿河を結ぶ3本の道の中で、中間にあるために「中道」と称された。

「中道」の文献上の初見

齊藤典男（1984）によれば「中道」の初見は、「為末世之書印写置申候」と題された文書であり、天正10年（1582）の徳川家康の甲斐入国の時であるという。

徳川家康は、天正十年（1582）二月武田氏の滅亡を目前にして早くも甲斐の経略に着手し、織田軍の甲斐進攻とともに河内路を経由して甲斐に入国している。さらに、戦後処理の後に織田信長を案内し家康は、新たに整備した古道「中道」を経由して帰還している。また、本能寺の変から起因した徳川家康と小田原北条氏との抗争では、徳川軍の先遣隊は河内路から入り、一段落してから家康は「中道」を通って入国しているという。

また齊藤は『信長公記』の天正10年の四月十日の記述を引用し、織田信長は、このように四月十日甲府を出発し、笛吹川に臨時に懸けられた橋を渡り、左右口宿に着陣した。左右口は徳川家康が入念に普請を行い、路幅は鉄砲隊が通れるように広げられ、宿所も立派に建てられ、警固も厳重になされていた。また兵士の小屋も千軒余り、朝夕に食事も用意されていたとしている。

四月十日、信長公、東國の儀仰付られ、甲府を御立ちなさる。爰に笛吹川とて、善光寺より流出する川あり、橋を懸け置き、かち人渡し申し、御馬共乗りこなせられ、うば口にいたって御陣取り。家康公御念を入れられ、路次通り鉄炮長竹木を皆（街）道ひろびろと作り、左右にひしと透間なく警固を置かれ、石を避け、水をそそぎ、御陣屋丈夫に御普請申し付け二重・三重に棚を付置き、其上、諸卒の木屋小屋千間（軒）に余り、御先々泊々々、御屋形の四方に作り置き、諸士の間叶の義、下々悉く申し付けられ、信長公奇特と御感なされ候キ。

近世の「中道」

近世から近代の中央線開通まで、海からの最短ルートとして重要な役割を果たした。上野原遺跡の前を通る現国道が、右左口「宿」の本通と T 字をなす角に常夜灯と道標がある（第1図の●印、第2図）。道標は南面し「右ハ甲府 左ハ市川 道」とある。南の駿河方面から右左口「宿」の本通りを抜けてくると、道標の右つまり上野原遺跡方向が甲府方面である。そして「宿」の本通りをそのまま進むのが、市川大門方面であ



第49図 「右左口」宿の道標

る。道標が本来あった位置から移動している可能性もあるが、市川大門がここから西方に当たり、これを左としている点から、若干の移動はあるにせよ、この付近に元からあったとすれば、上野原遺跡内を古道中道が通過していると傍証するものと考えられる。

また齊藤典男は、「左の道」から甲府に向かう複数のルートがあったことも指摘している。

今回の発掘調査で確認した道路間違構造と、家康の入念な「左右口」の普請との関係は明らかではないが、「信長公記」の記述からするとかなり大規模なものと想定される。今後の周辺の発掘調査では慎重な検討をするものと考えられる。

引用文献

山村信榮（1994）「太宰府周辺の道路遺構」『季刊考古学』第46号 pp63-66

齊藤典男（1984）「中道往還の概要」『中道往還』山梨県歴史の道調査報告書第三集 pp1-9

第2節 石器組成と打製石斧

出土した全石器の組成を把握するため、破片を含めた全点を集計し第4表上野原遺跡石器組成一覧に示した。またこれから全石器の組成（今回の第5次のみ）と遺構別に石器組成グラフを作成した。

全石器の組成をみると、磨石・石皿・多孔石などで約半分であり、打製石斧が31%を占める。そして石鎌が15%である。同様な集計を行った上の平遺跡（山梨県教育委員会1994）でも類似した傾向を示している。上の平遺跡は同一丘陵上に立地し（第2章参照）、縄文時代前期末から中期の集落跡である。この上の平遺跡では打製石斧が多く47%を占めるが、磨石（22%）・石皿（2%）・凹石（11%）などで約4割であり、石鎌が11%という組成を示している。2遺跡のデータではあるが、この地域の縄文時代中期の集落跡からの出土する石器の頻度を示しているものと考えられる。

石鎌は遺存の良い10点中で未製品が5点、他の5点も欠損品である。いずれも欠損して放棄されたものである。このあたりは石鎌の使用から想定される状況を反映しているものと考えられる。つまり拂行品・常備品は持ち去られ、狩猟中に失われるなどして、完形品は集落から外へ出していく。これに対して製作中に欠損した未製品、使用中に欠損して完形品と交換され放棄されるなどして、欠損品が集落内に残されたのであろう。当時縄文人が保有した組成としては、石鎌はもっと数量が多いものと考えられる。

また加工用具は集落内で使用されるのが主であり、使用に耐えなくなったものも集落内に廃棄されたものと考えられる。これに対して、打製石斧の用途は明確ではないが、この遺跡に限らず縄文時代中期の遺跡ではどの遺跡でも大量に出土している。しかしこれまでの報告によると、とくに打製石斧が集積されたりした状態はなく、欠損品を意図的に持ち帰ったことを具体的に証拠付ける例はない。そこで打製石斧が着柄されていたことから、欠損した刃部はその場に廃棄され、欠損した基部はまだ使用可能な柄とともに持ち帰られ、完形品と交換されて住居付近に廃棄された可能性が高いと想定される。

ここでは、組成の検討に留まったが、打製石斧の欠損品については刃部は使用された場所、基部は完形品と交換した場所に廃棄された可能性が高いと想定される。今後はこの仮説をもとに、打製石斧の部位と出土位置について検討を加えていきたい。

引用文献

山梨県教育委員会（1994）「6. 石器」上の平遺跡第6次調査・東山北遺跡第4次調査・銚子塚古墳南東部試掘 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第94集 pp37

報告書抄録

ふりがな	うえのはらいせき
書名	上野原遺跡
副題	国道358号甲府精進湖線改築工事に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第122集
著者名	村石真澄・大谷満水
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881
印刷所	峡谷堂印刷所
発行日	1996年3月30日
所収遺跡	うえのはらいせき 上野原遺跡
所在地	やまなしけんひがしやつしろぐんなかみちょううばくち 山梨県東八代郡中道町右上口 25000分の1地図 市川大門 位置 東経138°35'40" 北緯35°34'10" 標高346m
概要	主な時代 繩文時代中期中葉 中世 主な遺構 道路関連構5条(中世) 住居跡4軒(縄文時代中期中葉)、土坑・ピット約70基(縄文時代中期中葉) 主な遺物 繩文土器(中期中葉) 渡来銭1点(正隆元寶) 常滑三筋壺破片1点 中国産青磁破片1点 中世陶器破片
	調査期間 平成6年5月9日～12月9日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第122集

上野原遺跡

発行 1996年3月30日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 山梨県東八代郡中道町下曾根923
 TEL 0552-66-3016
 発行 山梨県教育委員会
 山梨県土木部
 印刷所 峡谷堂印刷所

